

二〇一一年二月一〇日、台湾清華大学から馬雅貞副教授を招聘し、「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会Ⅱ倭寇図巻と抗倭図巻をめぐる新視角―美術史の立場から」を開催した。本研究集会は共同利用共同研究拠点「日本史史料の研究資源化」の特定共同研究海外史料領域、及び画像史料解析センター「東アジアにおける「倭寇」―画像の収集と分析」プロジェクトによる研究として行なわれた。当日はまず、板倉聖哲共同研究員（東京大学東洋文化研究所准教授）より趣旨説明がなされ、馬氏の報告、山崎岳共同研究員（京都大学人文科学研究所助教）のコメントが続いた。以下、馬氏の報告、ならびに山崎氏の当日のコメントを踏まえた史料研究を掲げる。本集会の実施にあたっては、板倉氏ならびに植松瑞希氏（大和文華館学芸員）から多大なる御尽力をたまわったことを記して謝辞にかえたい。

（研究代表／須田 牧子）

戦勲と宦蹟―明代の戦争図像と官員の視覚文化―

馬 雅 貞

摘要

明代の文集には戦勲を描いた絵画についての記録が多く残っている。また、伝世作品も少数ではあるが現存していて、これらは明代の視覚文化を理解するための異なる観点を提供してくれる。このような同時代の戦争を題材にした絵画は、伝統的な文人画の範疇には属さず、商業的な工房の生産する倣古絵画でもない。彼らは独自の需要と表現形式、流通網を持っており、近年盛んに研究されている雅俗の交錯した明代文化とは趣を異にしている。戦勲図像はなぜ明代に流行したのだろうか。どのような内容を含むのか。どのような生産文化、視覚文化に属しているのか。注意すべきなのは、明代の戦争絵画は、個人の事績を中心に、特定の官員の功績をめぐる制作されており、清代中期以降の戦争絵画の多くが交戦対象を軸に制作されるのとは異なっている点である。多方面に

展開していた明代の戦争が、個人の功績という形でまとめられるのはなぜだろうか。このような現象と、戦功を記念する絵画が武官職のためだけではなく、地位がより高い、軍政を取り仕切るような立場の文官のためにも作られていたことは、どのように関係するのか。また、明代における戦争絵画の出現にはどのようなコンテキストがあるのか。本稿では戦争図に関連する諸問題を整理し、その出現と官員視覚文化との関係について考察する。さらに個別の版画作品を例に明代の戦勲絵画の発展を分析し、その影響についても簡単に論じてみたい。

はじめに

「題李霖寰少保平播冊」

親従黃石授書來

盟府勲名切上台

主帥幾誰鬪虎穴

文人今有画麟台

旌旂陡覺風雲變 凶版重將混沌開

元老黑頭真不數 金甌還倚補天才

「郭青螺六命冊」

日月旂常姓自懸 鏡歌凱曲舞衣前

師行長子標銅柱 帝念封君比渭川

摩頂麒麟堪入画 盟書帶礪永相伝

上公九命君家事 次第承恩已六篇

董其昌（一五五五—一六三六）『容台集』卷三。⁽¹⁾

中国美術史上、董其昌は書画の創作者、南北宗論を唱えた画論家、書画コレクターとして尊崇され、文人芸術の巨匠とみなされている。この二つの詩は、播州楊応龍の乱平定の功労者である李化龍（一五五四—一六一一）と郭子章（一五四三—一六一八）のために書いた、「題李霖寰少保平播冊」と「郭青螺六命冊」であるが、研究者のまとめた董其昌の書画鑑蔵題跋集に見られる文人的な、あるいは古典を題材にした作品とは性質を異にしている。⁽²⁾この二冊が文字を中心にしたものか、図像を中心にしたものかは不明であるが、いずれにせよ当時の戦功を主題とした作品であり、通常美術史学者が文人の文芸活動として認識しないものである。⁽⁴⁾この二冊は現存していないが、明代の文集には戦勲を描いた作品の記録が多く残り、少数だが現存する伝世作品もあって、明代の視覚文化を理解するための異なる視点を提供してくれる。当時の戦争を題材にした絵画は、伝統的な文人画の範疇には属さず、商業的な工房の生産する倣古絵画でもない。ほとんどが絵画史上に名前の残らない職業画家によるもので、独自の需要と表現形式、流通網を持っており、近年盛んに研究されている雅俗の交錯した明代文化とは趣を異にしている。⁽⁵⁾戦勲図像はなぜ明代に流行したのだろうか。どのような内容を含むのか。どのような生産文化、視覚文化に属しているのか。

また、董其昌のこの二つの文章は、商業発展、出版業の興隆、混ざり合う雅俗文化などの近年の明代社会理解と、明代に頻繁に発生していた倭寇の争乱とが無関係ではないことを示している。王鴻泰氏は最近の研究で、晚明士大夫の文化や都市生活は同時期の辺境紛争と関係しており、明代士大夫の習武の風潮や異文化交流が、国家の危機、社会の繁栄、個人の挫折が複雑にからみあう情勢の下で、「談兵論劍」の流行へと展開していったと論じている。⁽⁷⁾士大夫文化と倭寇の争乱との関係は、間接的に尚武の風潮に現れているだけではなく、戦争をめぐる表象の中により直接的に見出すことができる。嘉靖年間（一五二二—一五六六）に「倭寇」が引き起こした海防問題や、万暦年間（一五七三—一六一九）の三大討伐などについては、渦中にあった官員と、直接的間接的に影響を受けた民間の双方が、関係する図像や文化的表象を残している。例えば「嘉靖大倭寇」はかつて私貿易の利害の衝突の結果とみなされてきたが、近年、情報伝播と万暦年間の出版事業、地方官研究の視点から、晚明に特定の倭寇イメージが広まった原因について見直す研究が進んでおり、⁽⁸⁾倭寇は軍事的経済的問題であるだけでなく、文化的意義も有することが明らかになった。美術史学者の石守謙氏も、蘇州文人が倭寇の争乱を避けて南京に移住したために、金陵文化の主導者が貴族や富豪から地方文人に移り、これが浙派絵画の発展に打撃を与えたと指摘している。⁽⁹⁾このように嘉靖年間の江南文化に間接的な影響を与えた倭寇は、より直接的な反応も引き起こしている。当時、倭寇を平定した功労者はそれを絵画化し、江南の文人に題詩を依頼していた。例えば嘉定の王翹は、弾劾を受けた邵応魁のために戦功図を作り、徐学謨（一五二一—一五九三）、王世貞（一五二六—一五九〇）、王世懋（一五三六—一五八八）らが題詩を贈っている。⁽¹⁰⁾また、民間にも蘇州片と考えられる「胡梅林平倭図」⁽¹¹⁾が伝わっているし、倭寇と結んで閩浙の沿海を侵犯した王直（汪直）と

徐海を胡宗憲(一五二一—一五六五)が鎮圧した『胡少保平倭戦功』などの小説もある。文人にとって、あるいは商業的な絵画工房にとって、戦争は無関係の出来事ではなく、彼らの文化的生産活動と戦争が深く関わっていたことがわかる。

注意すべきなのは、明代の戦争についての文化的記述は、いずれも個人の事績を中心とし、特定の官吏の戦功を取り上げるものであり、「平定準部回部得勝図」のように交戦対象を軸に表される乾隆朝(一七三六—一七九五)以後の多くの作例とは異なる点である。⁽¹³⁾多方面に展開していた明代の戦争が、個人の功績という形でまとめられるのはなぜだろうか。このような現象と、戦功を記念する絵画が武官職(邵忠魁將軍など)のためだけではなく、地位がより高い、軍政を取り仕切るような立場の文官(李化龍、胡宗憲少保)のためにも作られていたことは、どのように関係するのか。また、戦争に関する明代文学や絵画の出現にはどのようなコンテキストがあるのか。本稿では戦争図に関連する諸問題を整理し、その出現と官員視覚文化との関係について考察する。さらに個別の版画作品を例に明代の戦勲絵画の発展を分析し、その影響についても簡単に論じてみたい。

一、明代官員の戦争図

伝統的な書画著録には、同時代の戦争を描いた絵画の記録はあまり残っておらず、一般の絵画図録にもほとんど見られない。しかし明代の文集を調べると、個人の戦勲を記念した戦争図に関する記述を数多く見つけることができる。これらの中には「題李広利(？—前八八)伐宛図」のような歴史上の戦争を描いた絵画への題詩もわずかに見られるが、ほとんどが明中期以後の、同時代の人物や出来事に対する題詩である。また、武官の戦功を記念する絵画への題、「題陳總兵百戰圖二首」⁽¹⁵⁾、「題張

將軍百戰圖」⁽¹⁶⁾、「凱旋圖為總兵官彰武伯楊公題」⁽¹⁷⁾、「題邵將軍海上戰功圖」⁽¹⁸⁾、「題大將軍出師圖」⁽¹⁹⁾、「大海波寧圖為沈將軍賦」⁽²⁰⁾などは主流ではなく、軍政を統括する文官のために描かれた戦争図の方が多い。「凱旋図序」(総督王以旂)⁽²¹⁾、「凱旋図頌」(副都御史羅明)⁽²²⁾、「出師禦敵図記」(憲使李君)⁽²³⁾、「劉觀察出師図序」⁽²⁴⁾、「題嶺海昇平図寿殷中丞」⁽²⁵⁾、「題熊心開中丞閩海昇平図」などの類似した題名のほか、文官の戦功図には、「臨戎決勝図序」(河南都御史鄧璋)⁽²⁶⁾、「大司馬大總制範溪鄭公制虜図序」⁽²⁷⁾、および平定という主題を強調した「朱憲副平賊図記」⁽²⁸⁾、「西平図詠序」(雲南巡撫陳用賓)⁽²⁹⁾、「平蛮奏凱圖為司徒王公賦」⁽³⁰⁾などの題名がある。戦功を記念する絵画を制作するのは武將に限らず、辺境の軍政にあたる中級高級文官が明代戦争図の主役であったことがわかる。

文官の戦功図が文献に頻繁に見られる理由の一つに文集の性質が挙げられる。官界では題詩を交換することがしばしば行われ、それらが記録に残る確率も高い。しかしそれ以外の理由も考える必要があるだろう。蒐集と流通の点から言えば、社会的経済的地位が代々保たれる士大夫の家は、先祖の文物を大切に保管するのに適しているし、子孫たちがさらに題跋を請う可能性も高く、記録に残りやすい。例えば、弘治年間(一四八八—一五〇五)、羅明(一四二九—一四八九)の「凱旋図」は「越四十六年、嘉靖甲午(一五三四)某(徐階)始從其孫元凱觀之」とあり、⁽³²⁾清の陳用光(一七六八—一八三五)は秦瀛(一七四三—一八一二)の「八世祖舜峰先生會試硃卷及凱還図画像」を見たことがあったと言う。⁽³³⁾これらは数世代にわたる収蔵を経た後、子孫が人に題を頼んだため記録に残っている例である。これに比べ、武官の戦争絵画が数代にわたってその家族の収蔵記録に残ることはなく、伝世作品もない。保存と伝来の点で優位に立っていることに加え、文官の戦争図の制作状況がより多元的であることも重要である。武將のための戦功図の制作背景に関

する文集資料はさほど多くはないが、貴重な例として先に紹介した「邵將軍戰功図」が挙げられる。これは幕僚の王翹が弾劾を受けた邵忠魁のために作ったものだが、邵氏自身が主導した可能性も高い。文官の戦勲図の中にも、自ら「属善絵者貌其平賊之状」⁽³⁴⁾したものがあるが、多くは部下やその土地の人民が制作に関わっており、武官職の幕僚が注文主となることも少なくない。例えば、「鄭公制虜図」は「上谷民部趙君某、大將軍麻君某、少參劉君某、僉憲劉君某、副總兵董君某、念奇績不宜浪浪、且当公岳降之辰、乃繪図上寿」⁽³⁵⁾したものであるし、「劉觀察出師図」は、その部将であった艾升が「追敘前勲、以出師絵図」⁽³⁶⁾したものである。王以旂の「凱旋図」もまた「鎮守総兵王君縉奉公部曲、乃繪凱旋図以狀軍容之盛」と言う⁽³⁷⁾。武将はあくまで文官の配下であり、戦勲も通常は上司である文官のものであることがわかる。またこのような文官個人の戦勲に関連した絵画は誕生祝として制作されることもある。前述した「題嶺海昇平図寿殿中丞」や「鄭公制虜図」に見られる制作状況がその代表的な例である。このように文官の戦功図は多様な制作背景を持っており、戦功図の主役が文官であることがわかる。

文集に記載された多くの戦争図がすでに消失してしまつた中で、明代の官員の戦争図を理解するための手がかりとなるのが、中国国家博物館所蔵の「平番図卷」である⁽³⁸⁾。巻末に跋を書く朱啓鈴（一八七一—一九六四）と瞿宣穎（一八九二—一九六八）が画中の人物名を考証しており、この画卷に描かれているのが、万曆三年（一五七五）甘肅洮州十八番族の平定であるとわかる。画中の「固原兵備劉伯燮督兵」、「陝西総兵官孫国臣統兵」などの標題は、『明史』の「洮州之變」と一致する⁽³⁹⁾。ただ、この画卷が顕彰するのは名前が標題にある官員たちではなく、そこには名前の見られない陝西総督の石茂華（？—一五八四）であろう。彼は巻頭の「軍門固原發兵」と巻末の「軍門固原賞功」の儀式で指揮を

とっている。石茂華は万曆元年（一五七三）より陝西地方の三つの辺境軍務を統括していたが⁽⁴⁰⁾、その職責は部下を率いて洮州西羌族を平定することだった。巻初と巻末で赤い官服を着て、ひざまずいた武将の前に端座する人物は彼以外に考えられない。標題で最初に名前の挙がる劉伯燮は、その文集「鶴鳴集」の中で、「平番図」を三冊作らせ、その内一冊は自分が所有し、残りは石茂華と孫国臣に贈ったと記している。

右平番図、滇南永昌生陸希顔：為余貌此冊、凡三。戊寅（一五七八）夏迄己卯（一五七九）春成。：一送之大司馬石公所、一致之孫都護、其一余藏之。：万曆癸未（一五八三）上元日⁽⁴¹⁾。

劉伯燮と孫国臣は「平番図卷」の標題の中で筆頭に挙げられており、この二人の上に立って統率する立場にあるのが、石茂華と考えられる。

「平番図卷」が顕彰する石茂華の戦勲は、出兵に始まって、行軍の陣容と戦闘場面が描かれ、賞功の儀式で終わる。これらは他の戦争絵画にも見ることができ、「平番図卷」は集大成的、総合的性格を持つものと言える。第一に、儀式は明代以前の戦争関連図像に類出する主題で、例えば北宋の李公麟（一〇四九—一一〇六）の伝承を持つ「免胄図卷」（台北故宫蔵）や伝遼代陳及之の伝承を持つ「便橋会盟図卷」（北京故宫蔵）などは、歴史故事中の同盟や投降、捕虜を宗廟に献じる儀式を描いている⁽⁴²⁾。同時代の戦争を描く明代の作品にも「三省備辺図記」中の「撫処銅鼓諸叛苗図」や「撫叛苗者重図」など、投降の儀式の描写があり、文集に記載される「出師禦敵図記」、「劉觀察出師図序」も「平番図卷」における出兵の儀式に相当する場面であった可能性がある。また「平蛮奏凱図為司徒王公賦」や「凱旋図序」も賞功の式典を描いたものと推察できる。第二に、行軍は明代戦争絵画中で特によく見られる主題である。金代の作と伝わる「趙通瀘南平夷図卷」（Nelson Gallery-Atkins Museum of Art）には将軍が率いた騎兵の隊列の描写がある。「平番図卷」に見

られるような盛大な行軍は、周鼎についての「善写真、客左良玉（一五五九―一六四五）幕中、嘗絵出師図、人馬器仗、旌旗壁壘、饒吹鉦鼓、鎧袍盾櫓、車牛驢駝輜重之類、備極精工、累紙十餘丈、彩攢錦簇、復饒疏落之致」という記録にも見られる。⁽⁴⁵⁾ また、先に紹介した明代文集にしばしば見られる「出師図」は、おそらく強大な軍容を誇る行軍場面を描いたものだろう。最後に戦闘場面だが、これは明代に次第に増加していったものである。「趙遙瀘南平夷図巻」中、乾隆帝が「此段画趙遙出師攻克村國諸落事」、「此段画用火揉破輪縛大圍事」と題する部分には、具体的な攻防、戦況はほとんど描かれていない。それに対し、「平番図巻」における番族との戦闘場面には、明兵が燃えさかる建物の中で「番賊」を打ち殺す様子が生き生きと描写されている。明代の通俗小説には登場人物の殴り合いを描く挿図もよく見られるし、後に述べるように『三省備辺図記』は平地倭寇、山寇、海寇、籠城する潮寇との戦闘を描き分け、戦場や敵方によって異なる戦闘の図式が表されている。

しかし全体から見れば、「平番図巻」の戦闘描写は全体の約五分の一に留まっています、比重が大きいのはやはり儀式や行軍の場面である。典礼や軍容が強調される一方で戦闘場面が限定されているという事実は、表現の主眼が異民族を討伐する武力ではなく、整然とした儀仗や軍礼にあることを意味する。同様に、石茂華は軍装で戦闘に参加する姿ではなく、官服を着て儀式を取り仕切る姿で描かれる。『三省備辺図記』においても、複雑に発展した戦闘の図式が見られる一方で、「奉救整飭都清、伸威、興泉等處兵備」と言う主役の蘇愚は、軍装ではなく、⁽⁴⁷⁾官服と官帽を身につけ傘蓋と軍旗に囲まれて、戦闘を指揮しているというよりは戦場を視察しているように描かれている。明代には文官の戦勲図が盛行するが、強調されているのは武芸に長けた軍事指導者ではなく、あくまで文官イメージの範囲内におさまる、出兵の指揮、戦略の論議、論功行賞

などを行う姿なのである。

また、「平番図巻」の巻頭と巻末には戦争と関係のある場面ではなく、固原城城壁と付近の建築物が描かれている。これらの建築は、長い画卷の冒頭や末尾によく見られるような漠然と付け加えられた曖昧な風景ではなく、「東嶽廟」という題や、「総督三辺」、「望軍樓」、「校場」、「後柴亭」などの書き入れによってはっきりとその存在が特定されている。石茂華が洮州を平定したことを記念する作品に、なぜこのような建築が描かれたのだろうか。まず、巻頭と巻末に描かれた、「三辺雄鎮」と示される固原州城について検討したい。この州城は出兵の場所として描かれているが、特に巻頭の堂々とした城郭描写は、地方志の「万曆三年（一五七五）総督石茂華以土築不能垂遠、乃甃以磚泊乎」という記述を連想させる。このように、「平番図巻」における固原城は辺境防衛の要衝としての重要性が強調されているが、これはおそらく石茂華が磚で城壁を強化した実績と関係があるだろう。後世の地方志が石茂華の政治的功績に言及する際には、「奏甃磚城、建尊経閣、城南書院置字田、設昭威台於東城以望辺烽、開城北暖泉入清水河濟民汲食。州人頌德弗衰、申請入名宦祠」と、「奏甃磚城」が筆頭に挙げられる。「平番図巻」に見られる雄大な固原城城壁の全景は、石茂華の宦蹟を顕彰する役割も担っていたと考えられる。また、固原城東方の東嶽山頂にある東嶽廟、⁽⁵⁰⁾東南に位置する校場、⁽⁵¹⁾南にある後柴亭が巻頭に置かれていることから、「平番図巻」が固原城の東南を描いていることがわかる。これは城壁に関わる石茂華のもう一つの業績、昭威台の建設と関係があるのではないだろうか。地方志の中で、「按台在州城東南城上、明総督石公茂華所建。環甃以磚、有階可循、蓋築以望烽埃也」と述べられる昭威台は、⁽⁵³⁾図中で「三辺雄鎮」と標示されているところである可能性がある。また、画中に見られる固原城東南にある校場付近の高台には「望軍樓」と掲げられてお

り、ここに望烽の機能があつたとも考えられる。⁽⁵⁴⁾ いずれにせよ、「平番図巻」の固原州城はただ出兵の場所として描かれたのではなく、この重要な辺境防衛の城における石茂華の政治的功績を暗示するものである。また、東嶽廟と後楽亭は石茂華の建設したものでないが、前代の総督たちの政治的軍事的業績と関係する。東嶽廟は嘉靖二十七年（一五四八）、総督の任にあつた王以旂（一四八六一—一五五三）が建設したものであり、⁽⁵⁵⁾ 上に「東嶽廟感応碑、按碑刊於明嘉靖二十八年（一五四九）、総制王公以旂、知州倪公雲鴻建在東嶽山。其略云提兵過境、神靈呵護、因紀其事」とある。王以旂は「安靜不擾凡五年。最首功番虜共六百餘級、塞定辺瓦植梁三十餘里、收属番三千四百餘人置嘉裕関外」という人物であり、⁽⁵⁷⁾ 明代の文集にはその「凱旋図」の記録が見られる。後楽亭は嘉靖十一年（一五三二）に総督職にあつた唐龍（一四七七一—一五四六）が建てたもので、「公餘在州城南三里、開魚池、建後楽亭、以通流泉焉」と記される、⁽⁵⁸⁾ 有名な事績である。唐龍は「（嘉靖）十三年（一五三四）破虜之犯甘肅入安会者、最功得四百餘級」、⁽⁵⁹⁾ 「救荒十四事、賑禦兼籌」という人物である。これらは洮州平定と「開城北暖泉入清水河濟民汲食」という、石茂華が成した文武両面にわたる宦蹟に相当する。同様に文武を兼ね備えた范仲淹（九八二—一〇五二）の名言「後天下之楽而楽」に由来する後楽亭を、「平番図巻」が特に描き加えたのも不思議ではないだろう。⁽⁶¹⁾

「平番図巻」の分析からは次のようなことがわかる。文官のための戦勲図には戦闘場面も描かれるが、軍事的な武功が誇示されることはなく、軍容と典礼の描写が重視され、関連する宦蹟にも注意が払われる。文官の戦勲とその政治的業績は密接に関係しており、戦争図は総督や巡撫らが乱を平定したことを記念して作られたものではあるが、官員個人の政治的業績を描く絵画の一環でもある。次に、明代のいわゆる宦蹟図

に注目して、その戦争図との関係および関連事例について論じてみたい。

二、宦蹟図と官員社会の視覚文化

明代官員の戦争図像は、独立した作品以外に、現在学界で宦蹟図と呼ばれている作品群においても見ることができる。現存する「王瓊事蹟図冊」（中国国家博物館蔵）第十六図「経略三関」は、王瓊（一四五〇—一五三二）が兵を率いて出征する場面を描いているし、⁽⁶²⁾ 「梁夢龍恩榮百紀図冊」（中国首都博物館蔵）中の「旄鉞三辺」、「黃崆防禦」などの図は、⁽⁶³⁾ 梁夢龍（一五二七一—一六〇二）の辺境軍務と関係があるだろう。文集においても、個人の事績を描く作品に戦勲が組み込まれた例が見られる。例えば、「詠徐大夫素履十二図」には「持節平番」と「靖海揚戈」⁽⁶⁴⁾ が、「題明范文忠公画像并宦蹟図」には、范景文（一五八七一—一六四四）の「援廬奏捷」、「豫師護陵」、「援滁拒寇」などの戦功が描かれている。⁽⁶⁵⁾ このように、戦勲は官員の業績の一部として宦蹟図に描かれる題材なのである。また、宦蹟図における戦争関係の描写は、独立した文官の戦勲図と同様、軍事力や武力を強調するものではない。現存事例は少ないが、そこに見られる戦勲図像は戦闘場面ではなく、主に出征（王瓊の「経略三関」、梁夢龍の「旄鉞三辺」と典礼（梁夢龍の「黃崆防禦」）の描写である。また主役である官員も軍服ではなく官服を着ており、単独の文官戦勲図の作例の特色と一致している。⁽⁶⁶⁾ 明代文官の戦勲図の発展は、宦蹟図と共に考察する必要があるだろう。

いわゆる宦蹟図についての研究は始まったばかりである。楊麗麗氏は北京故宫所蔵の「徐顯卿宦蹟図」の紹介の中で、故宫所蔵の肖像画の内、「ある個人の生涯を複数の場面にわたって記述する肖像画で、内容には宦蹟、省親、祭祖、行楽、遊樂、患疾などが含まれる」ものが宦蹟図で

あると言⁽⁶⁷⁾う。これらの内容の全てが公務と関係するわけではないが、官員を主役とし、官吏としての生涯を中心に描いていることが重要であろう。現代人にとっては私生活である部分も、後に述べるように明人にとっては官吏としての経歴の一部であった。したがって本稿ではこの「宦蹟図」という名称を使っていきたい。ただ、明代にはこの種の絵画に統一の名称はなく、多くは、官吏としての経歴を描くという意味で、「履歴図」⁽⁶⁸⁾、「官途履歴図」⁽⁶⁹⁾、「巡歴図」⁽⁷⁰⁾、「行歴図」⁽⁷¹⁾などと呼ばれていた。また、「王陽明先生図譜」という名称は、個人の生涯から重要な事件を選び、時系列に並べて描くという宦蹟図の特色を明らかにするものである⁽⁷³⁾。経歴を描いたものであることを示すほか、その事績の数を併せて称するもの、個人への賛辞の言葉を付け加えるものがある。例えば、「詠徐大夫素履十二図」⁽⁷⁴⁾、「江陵龍侍御四美冊」⁽⁷⁵⁾などである。このほか、宦遊と題する「宦遊紀勝雜題為唐大參賦」は、「鹿鳴燕罷」、「瓊林醉帰」、「京庾巡行」、「藩垣議政」、「金門待漏」、「公餘行楽」などの、官員の生涯における十の事績を時系列に沿って描く。一方、この種の明代絵画を「宦蹟図」と呼ぶ記録は清代晩期にはじめて見られる。現在文献上で確認できる二つの作例は、後に子孫が題跋を依頼したために記録に残ったものであり、前述した戦勲図と同様に代々その家に伝わったものと考えられる。一つは黄彭年（一八二四—一八九〇）『陶樓文鈔』にある「題明范文忠公画像并宦蹟図」⁽⁷⁷⁾、もう一つは陸心源（一八三八—一八九四）『穰梨館過眼録』の「張恭懿公宦蹟図卷」である⁽⁷⁸⁾。明代には定まっていなかった名称は、清代になってようやく統一され、絵画の著録にも時に宦蹟図の記録が見られるようになった。ただ、文集以外の文献にもその名が見られるようになったとはいっても、著録の類にこの種の絵画が収められることはやはり少なく、現代の絵画図録に収録される図版も限られている。このため、宦蹟図に対する研究はまだ開始段階に留まっていると言

える。

先に紹介した記録からもわかるように、戦勲図と同様、宦蹟図の主役も多くが進士出身の中高級官僚であり、そのためこれらの宦蹟図に選ばれる場面には戦勲図と共通するものが多い。最もよく見られるのは科擧及第を祝う郷試の鹿鳴宴、会試の瓊林宴と、入朝の榮譽を受ける金門待漏である。前者は官員への階段を上る重要な通過点であり、後者は正式に官員となった象徴である。「徐顕卿宦蹟図」は「鹿鳴徹歌」と「瓊林登第」を、「梁夢龍恩榮百紀図冊」は「鹿鳴嘉宴」と「恩榮賜宴」を、また「題儲御使四図」は「帰宴」と「待漏」⁽⁷⁹⁾を、前述の「官遊紀勝雜題為唐大參賦」は「鹿鳴燕罷」、「瓊林醉帰」、「金門待漏」などの場面を描く。中高級官僚はその経歴において、たいいてい皇帝の使節として巡行を経験するが、「秦使晋陽」⁽⁸⁰⁾（梁夢龍恩榮百紀図冊）、「行驄」⁽⁸¹⁾（題儲御使四図）、「巡視風廬」⁽⁸²⁾（王瓊事蹟図冊）などはこれを描いたものである。先に述べたように、辺境の軍務総督の任に付き、任期中に紛争が起れば、その宦蹟図には戦勲に関連する図像が含まれることになる。

在官中の事績と直接関係するもの以外に、公務ではない出来事や退職後の事件も宦蹟図に含まれている。「官遊紀勝雜題為唐大參賦」における「燕居展卷」、「公餘行旅」のような公休中の出来事や、「梓里榮帰」⁽⁸⁰⁾（王瓊事蹟図冊）のような退官後の帰郷、「詠徐大夫素履十二図」における「帰田課孫」のような隠居生活がその例である。ただ、これらは官員の身分と無関係ではない⁽⁸¹⁾。科擧に及第して官員となった栄光は父母にまで及ぶものであり、宦蹟図には時に両親も登場する。例えば、「南宮第一時双親具健」⁽⁸²⁾（題宮定庵四蹟図）、「赴雪省親」⁽⁸³⁾（題明范文忠公画像并宦蹟図）、「萱寿壘封」⁽⁸⁴⁾（江陵劉侍御四美冊）、「幽隴沾恩」⁽⁸⁵⁾（徐顕卿宦蹟図）などである。宦蹟図は、官員である間の事績だけでなく、官途と関係しさえしていれば、公私を問わず生涯に起こったこと全てを

描写対象にする。このため宦蹟図の中には、「兄弟読書図」（題宮定菴四蹟図）、「庭闈受業」（詠徐大夫素履十二図）など、科挙受験前の出来事から描き始めるものもあるし、「子姓祭掃」、「遣官諭祭」（王瓊事蹟図冊）など、死者への哀惜とその顕彰を描いた、その官員が死亡してから制作と考えられるものもある。

明代官員の戦勲図が単独で描かれたり、宦蹟図の一部として描かれたりするように、宦蹟図に類出する他の図像が、独立した作品として制作されることもあった。特に鹿鳴宴、瓊林宴、待漏図は、現存作例には乏しいが、明人の文集には多くの記録が残されている。一方で、宦蹟図の詳しい内容説明をしている記録は少なく、先に紹介した主要な主題は厳密な意味で全面的なものとは言えない。ここでは文集に見られる単独作例から、官員のキャリアにおける重要な出来事として宦蹟図に描かれた内容を推測できる点にも注意したい。前述した出使、巡行の主題には、「題臧栢岡司寇行辺図」⁽⁸³⁾や「省辺図」⁽⁸⁴⁾などの辺境関係の内容も含まれるし、これは「驄馬觀風図序」⁽⁸⁵⁾、「題恩県行台屏風画使者觀風図」⁽⁸⁶⁾など、風俗の視察とも組み合わせられる。「觀風図詠」は、序文の「録公善政懿哉」という記述から、⁽⁸⁷⁾地方に派遣される使節の儀仗行列に加え、おそらくは具体的な政治的功績も描いていたと考えられ、この点において、徳政を描く「侍御使八閩陳公德政図」⁽⁸⁸⁾や、「留犢図寄贈樊使君」⁽⁸⁹⁾なども類似している。また、帰朝を描く「觀闕榮還図」⁽⁹⁰⁾や「送別少司徒張公督餉北還図詩序」⁽⁹¹⁾、皇帝に謁見する榮譽を描いた「傅日川兄弟入朝図」⁽⁹²⁾、「徐吏部父子朝天図」⁽⁹³⁾、「面恩図頌」⁽⁹⁴⁾などがあり、さらに個人の官員としての経歴を皇恩への感謝という形でまとめる「恩遇図序」⁽⁹⁵⁾や「四朝恩遇図」⁽⁹⁶⁾などもある。仕官中の栄光ある業績のほかに、任官のため遠く離れてしまった両親への思いを描いたものとして、「題楊愈憲潤思親卷」⁽⁹⁸⁾、「題宦遊思親卷」⁽⁹⁹⁾などが挙げられる。父母が共に健在であることや俸禄を受け

たことを祝う「具慶図為李岱給事中作」⁽¹⁰⁰⁾や「楊給事婦慶図」などの作例もある。注意したいのは、文集中に見られる単独で絵画化された事績は、組み合わされて一組の宦蹟図ともなりうることである。傅日川兄弟の事績を絵画化した、「入朝図」⁽¹⁰¹⁾、「雁行待漏図」⁽¹⁰²⁾はその例であるし、林大春「井丹先生集」に列挙される「造士図賛」⁽¹⁰³⁾、「巡海図賛」⁽¹⁰⁴⁾、「迎恩図賛」⁽¹⁰⁵⁾、「勸農図賛」⁽¹⁰⁶⁾は、統一された名称を冠してはいないものの、同一人物の手によるものと考えられる。

このような多彩な内容の記録からは、宦蹟図に関連する図像が明代に盛行していたことがわかる。また表現の型もいくつか形成され、それぞれ異なる反応を引き起こしていた。現存作例は少なく、出版公開も限られているが、文集の記録を参照すれば、宦蹟図をめぐる図像のパターンを抽出することができる。例えば、「陳伯友早朝像軸」（北京故宮蔵）の中で、陳伯友は官服を着て両手に笏を持ち、壮麗な樓閣が並ぶ宮殿の門外に立っている姿で描かれる⁽¹⁰⁷⁾。これは、王材（一五〇九—一五八六）の「自一命以上拜恩於朝、還旅舍必求絵事者貌之、其上則五雲繚繞、重宮複殿、玉柱蟠龍、金梭棲雀、銀河迴合、碧樹參差、約如聖天子臨御之所。下則梁冠帶佩、衣裳秉笏、曳鳥透迤、拱肅遲佇、于闕廷之外、名之曰金門待漏図」という記述と一致する。ただ、これは明らかに誇張された表現で、王材は続けて「然朝廷之典、非大礼称慶、…皆幘袍靴笏而已」と言っている⁽¹⁰⁸⁾。また、王畿（万曆戊戌—一五九八）進士⁽¹⁰⁹⁾は、自分の生涯の事績を描いた絵画を故意に「賤歴図」と名付けている。この中には「窮苦諸図」のほか、通常の宦蹟図の範疇に収まりうる「通仕諸図」なども含まれているが、王畿は輝かしい経歴を誇張して描く宦蹟図が溢れている中で、対極とも言える「賤歴」によって俗に流れるのを避けようとしたのだろう。また、文官周煦が寡婦となった母のために作らせた「誌窮卷四図」は、男性官員にとって見慣れた「履歴図」という題名は付けず

に、母親の一生における「青年守志」、「遺腹伝芳」、「孤児発科」、「四世承權」といった女性としての功績を称揚する。

しかしこれらはいくまで特殊な例であつて、文官でない者も大多数は、官員が経歴を描く型を踏襲しており、そこには宦蹟図の影響が濃厚である。例として、「欽遣使臣賚敕徵聘」、「欽命禱雨相」、「慶八旬合家歡樂相」などの、道士邵元節（一四五九—一五三九）の二十六の肖像を描いた官刻本『賜号太和先生相贊』や、劉大夏（一四三六—一五一六）の題を持つ「楊參將出征小像」、「戰罷歸來小像」などの武官の肖像が挙げられる。個々の内容を模倣した例もある。例えば「題晏太監行辺図」は、行政官僚ではない宦官も出使を絵画化していたことを示している⁽¹¹⁾、女性が皇后に拝謁するという特殊な出来事を描く「趙淑人宮門待漏図」も、男性官員の作例を参照している。宦蹟図のモデルを採用した彼ら非文官は、文官の親戚や同僚であつて、官員との交流があつたという点には注意すべきだろう。宦蹟をめぐる絵画制作は文官とそのネットワークの中で行われており、宦蹟という主題は、官員社会が独自の視覚文化として発展させたのである。

明代の官員を取り巻く視覚文化は、宦蹟図に留まらない。例えば、「五同会図」、「十同年図」のような、同じ年に科挙及第した官員たちが官服を着て庭園に集う雅集図も、官員視覚文化の一部と言える。肖像以外にも、宋后楣氏は明代の画馬についての研究で、「駿馬行春図」、「駿馬采任図」、「駿馬朝天図」、「五馬趨朝図」、「五馬朝回図」などが文集に多く記録されていることから、十五世紀中葉、御史の間では画馬の制作が非常に盛んで、これは使節として派遣される際、あるいは宮廷に戻る際の送別の贈り物であつたと指摘している。さらに「送寇公去任図」のような、地方官が任地を離れる際の送別図も、官員視覚文化と深く関わっている。このような作品の多くは、伝統的な絵画の図式を応用している。

例えば、「十同年図」は、高官の雅集図である「杏園雅集図」の図式を踏襲しており、人物を正面観で描き、先に紹介した「陳伯友早朝像軸」のような肖像画の表現に近づいている点が異なるのみである。官吏は使節派遣や地方赴任の際に宮廷の馬を拝領する。「五馬趨朝図」は任仁発の九馬図の図式を応用して駿馬を描くことで、使節として派遣される、あるいは地方に赴任する、官馬に乗った官員を比喩的に表している⁽¹²⁾。「送寇公去任図」は明代の名勝図の型を用いて任地の美しい景色を描くことで、地方官の徳政を表すものである。このように、文官の間では、伝統的な図式を利用し、特定の事件や状況に応じて調整を加えた、ネットワークの媒介となるような絵画制作が流行していた。官員たちは、このような絵画を贈り物として用い、互いに見せ合い、題跋を書き合うことで、社交関係を保持し顕彰したのである。

明代中期以降、官員の視覚文化は隆盛を極めていく。個人の経歴を描いた宦蹟図や、その宦蹟図の内容を単独で表した作例、隠喩的表現をとる画馬など、官員視覚文化をめぐる絵画はいずれも個人の事績を中心に発展している。官員視覚文化の背景には明代における多元的な視覚文化の興隆がある⁽¹³⁾。明代中期から後期にかけて、科挙の競争と政界での党争は日増しに激烈になり、科挙に及第して、中高級の文官となつても、生き残りは簡単ではなくなつていった。このため、官員としての生涯を無事に終えることは賞賛に値する荣誉と考えられるようになったのだろう。宦蹟図の流行はこれに深く関わっている。先に紹介した、個人の事績を中心とした文官の戦勲図は、宦蹟の記録が流行していた官員視覚文化の中で盛んに制作されたのである。

三、書籍として出版された戦勲図像

しかし戦勲図は、宦蹟図によく見られるその他の主題とはやはり異なる

るところがある。軍政を統括する役職はさほど多くはないし、在任中に実際に紛争が発生する確率も低い。このため、戦勲図と宦蹟図が記念するものの意義には違いが見られる。ここで、王材が「家于京三世」の榮子安のために書いた「金門待漏図序」を見てみたい。

四方之士、出於荒樸、其顛質未散、耕無吠、買無貲、則勵志於学。

：居京都者、自提抱所見、罔非浮靡譎怪之機、市易供用之事、富者土木於膏蠹、貧者當時給日、未始為信宿計也、視為学不可期、故仕者鮮。：然服是服以入者既鮮、則繪之亦足以誇其族戚里閭、而示其

子孫、易其市易供用之心、浮靡譎怪之智、土膏木蠹之愚、當時給日之鄙。⁽¹²⁰⁾

王材は、榮子安が数少ない「以都人登内列」であることを強調するため、北京の一般人は多くが世俗の誘惑に負けて学問を志さなくなっていると主張するが、商業が発達する一方で科擧の競争が過熱化していた明代中後期、北京以外においても、同じような状況が生じていたのではないだろうか。このことから、宦蹟図には描かれた人物の榮光を称揚する機能のほかに、王材が「示其子孫」と言うような教育機能があったと推測できる。子孫たちには、先代の具体的事績を模範として励むことが期待されておられ、「以示後世子孫」とその制作意図が明記されることも多い。⁽¹²¹⁾これに対し、個人の戦勲図にはいわゆる教育機能はない。戦争は一般に喜ばれるものではない。例えば劉伯燮（一五三二―一五八四）は三冊の「平番図」の自序の中で、「令三氏子孫自後儻有合焉、以備世講」と言うだけで、⁽¹²²⁾ここでは「平番図」の希少さのみが強調されて、これを模範として提示する意図は感じられない。

もし宦蹟図の教育機能の中心が「示其子孫」であり、その家に代々収蔵されるものであるなら、明代中期以降の出版文化興隆の中で、前述した官刻本『賜号太和先生相贊』以外に、宦蹟図の出版がないのはなぜだ

ろうか。なぜ辺境行政や戦勲に関わる官員の事績だけが、特に「図」と題した三冊の版本、『安南来威図冊』、『三省備辺図記』、『剿賊図記』として世に伝わっているのか。⁽¹²³⁾なぜ、この三冊の戦勲図は宦蹟図や戦争図が伝統的にとってきた絵画という媒体ではなく、出版という媒体を選んだのか。資料の制限があるため具体的な回答は難しいが、制作の概要と図像の比較を行うことで、これらの問題を検討し、明代戦争図の発展と特色、および晩明の出版文化との関わりについて考察してみたい。

■『安南来威図冊』

現在北京国家図書館に所蔵される『安南来威図冊』は、安南における莫登庸（一四八三？―一五四一）の乱の招撫を描く。⁽¹²⁴⁾前半部分は『安南来威図冊』（全体の名称と区別するため、以下『安南来威図』と呼ぶ）で、図説や序詠を付す。後半部分の版心には『安南輯略』とあり、この事件に関する文書を収める。前後半ともに「安南」を題にしているが、その内容は当時の広西太平府知府であった江一桂（一四八五―一五四五）を中心に、彼の安南事件での働きを称揚するものである。『安南輯略』上巻は江一桂の行状、墓誌銘、伝記などを収めた、彼の経歴の記録である。『安南来威図』の冒頭には、「白石先生像贊」、「白石先生小像」と、江一桂の死の数ヶ月前に嘉靖帝（一五二二―一五六六）が下した、雲南赴任の勅令が掲載される。上巻には「單騎奉辞」、「因畧歌凱」、「定平報成」などの、江一桂が莫登庸の乱を鎮圧する過程が描かれ、中巻には「開壁受降」、「典納方物」など、その後の儀式や戦果を描く。下巻は、建寧、鳳陽、太平などの各地の民が江一桂の徳政を慕う、「留都遺愛」、「光榔生祀」を描き、その間に「征南奏捷賦並序」、「奏績序」、「本邑崇祀文」などを加えたものである。このように『安南来威図』は、江一桂の安南での事績と地方における徳政を描写した宦蹟図と言ってよい。『安南輯

略』上巻にも、江一桂の個人的な経歴を記録する文章が収められている。この中に、凌瑄が一五六六年（嘉靖四十五年）に書いた『脩攘図冊序』があり、「（江一桂）之子太学生原泉君、孫鄉進士儀卿君、取建寧、鳳陽、太平旧所嘗為図、絵為一冊、凡士民之叛留、戎衛之讐服、轅門之委任、土夷之信服、一一為之臚列、為之標目、一展卷而以政得民、以威服衆……」と述べる¹²⁶。この序文から、江一桂の宦蹟図はもと「脩攘図」という名であったことがわかる。『安南来威図』を編纂する際、凌瑄の一五六六年の序文は巻頭に複製されたが、書写した時期は一五七一年（隆慶五年）、題名は「安南来威図冊序」と変えられ、さらに「郡博馮子、邑令梁子嘗為公標校来威図」などが加えられている¹²⁷。

また、『安南来威図』の目録とその内容には一致していない¹²⁸。さらに、『安南来威図冊』には『安南来威図』と『安南輯略』を統合した目録はなく、いつ一書となったのかその経緯についてはよくわからない。この書物は複数回に及ぶ編集、出版を経ているのだろう。『明史藝文志』と黄虞稷（一六二九—一六九一）『千頃堂書目』には、『江美中安南来威輯略』という書が収録されており、これには、現存する『安南来威図冊』には見られない「前給事中嚴從簡安南来威輯略序」と沈懋孝「安南来威輯略後語」が付されていたかもしれない¹²⁹。しかし図についての言及がないこれらの書物が、実際は『安南来威輯略』と『安南来威図冊』のどちらなのかについてはよくわからない。また、嚴從簡は序文の中で「前給事中」と称し、さらに「予罪竄星源、暇閱新安宦業伝白石江公……後獲安南来威輯略」と述べており、これを記したのはおそらく一五六七年から一五七五年にかけて、彼が婺源県丞に降格されていたときか、それ以降であることがわかる¹³⁰。嚴從簡が見たのは凌瑄の一五六六年の序文を持つ『安南輯略』よりも後の版本であろう。ただ、現存する『安南来威図冊』には嚴の序が付されていないことから、嚴從簡が序文を書いた

のは『安南輯略』ではなく、それとは別本の、現在は失われてしまった『安南来威輯略』であるとも考えられる。もしくは、嚴從簡の経歴やその他の原因によって、現存する『安南来威図冊』では、嚴が『安南輯略』のために書いた序文が削られてしまったのだろうか。

『安南来威図冊』系統の書物が数回にわたって改編され刊行されていたことと、江氏三代の生涯は深く関係しているだろう。郷薦によって官位に付いた江一桂には特別な功績はなかった。『安南来威図冊』は彼の宦蹟を逐一記録してはいるが、中心となる安南事件について言えば、『明実録』中に江一桂がこの事件に参与したという記録はない。もし『安南来威図冊』が残っていなければ、この事件における江一桂の役割が史料に残ることはなかっただろう。逆に、江一桂に関する『明実録』中の唯一の記載は、「革雲南按察司副使江一桂職、仍命所司逮治之。以一桂先任広西太平府知府、脏汚不職、為巡撫都御史張岳（一四九二—一五五二）論劾、故也。」というものである¹³¹。この免職の一件は、『安南来威図冊』に付された、雲南赴任を命ずる嘉靖帝の勅令から、わずかに三ヶ月後のことであり、免職令が下された数日後、江一桂はこの世を去っている。沈懋孝が「安南来威輯略後語」で、「忠信行蠻貊、而不獲於当路、其命也。夫不有茲編、後世曷知。」と言うのももつともである¹³²。主な編者の一人、江美中も特に功績があった人物ではない。地方志によれば、江一桂の安南での働きは「一切多美中賛画」であり、江美中は父親の安南での功績を特に強調しているのかもしれない。江一桂の功績を記念する活動は、孫の江朝陽が嘉靖三十四年（二五五五）、科挙に及第してからさらに活発になり、十餘年をかけて墓誌銘、伝記、宦蹟図への序文などが次々に人に依頼された。これを基礎に『安南輯略』が編纂され、『安南来威図冊』に結実したのである¹³³。

江美中と江朝陽の出版した江一桂の宦蹟図には、絵画という媒体を用

いない点以外にも、通行の宦蹟図には見られない特色がいくつか指摘できる。まず、江氏は一般の宦蹟図に見られるような進士出身の高級官員ではない。江氏のように郷薦によって官位を得た身分の低い外官は、宦蹟図の中心的内容である「瓊林宴」、「金門待漏」などに加わることができない。身分の低い官員の在官中の事績を描く例もあるが、その多くは徳政を賞賛する単独の作例である。例えば「貴州有府名程番」のために作られた「鄧程番遺愛図」や「絵図贈美鄧令蔣君徳政序」が挙げられる。⁽¹³⁷⁾ また数は少なくても珍しい事績があれば、中高級官員の宦蹟図をまねてまとめることができる。徳政のほかに「連城禦寇」、「胥水征蠻」など、一般の府県政府では見られない政治的業績を描く「鄭節推八事卷」がそのよい例である。「鄭節推八事卷」は中高級官員の宦蹟図の型をそのまま採用しており、似たような題を付け、宦蹟図によく見られる「鹿鳴宴」などの科挙及第に関わる事績を描く代わりに、大学の「橋門卒業」を冒頭に置いている。⁽¹³⁸⁾ これに対し、「安南来威図」は宦蹟図の通例にはない題を付ける。また、前述した「誌窮卷四図」のように、特別な名称を採用することで特定の主題を強調するだけでなく、宦蹟図が時系列に沿って個人の生涯を語ろうとするその構造自体を放棄している。「安南来威図」はその目録で「外攘本於内修：於是覆跡諸所絵図以附焉」と述べているが、安南事件より前の事績である、建寧と鳳陽における江一桂の政治的業績を、太平府などにおける徳政に加えるかたちで莫登庸の乱の鎮圧の後ろに置く。つまり「安南来威図」は、江一桂の宦蹟を安南事件が中心になるように再編集し、その際に一般の宦蹟図が採用する時系列の構造を放棄している。「安南来威図」はこのように中心となる主題を明確に示すことで、通常の宦蹟図よりも生き生きと江一桂の事績を描き出すことに成功している。また、絵画を媒体とする宦蹟図では、描かれる事績の数は十から二十に留まり、「梁夢龍恩榮百紀図冊」のような

作例はあくまで例外である。これに対し、刊行された書籍は数十から数百頁あるのが普通で、『安南来威図冊』も図のほかに、「投降本」のような関連する文書、「征南奏捷賦並序」、「奏績序」のような人民の賛辞も収録し、図と文を並置して江一桂の業績を一層際立たせている。絵画形式の宦蹟図では、副本があったとしても、流通の範囲は限られてしまうが、『安南来威図冊』は大量に印刷され、広い範囲に伝播することが可能である。江美中と江朝陽の『安南来威図冊』は、印刷という媒体と、安南事件を中心に据えた編集によって、江一桂の政治的業績を一般の宦蹟図よりもわかりやすく伝えているのである。

■『三省備辺図記』

『安南来威図冊』は安南事件を中心に江一桂の事績を再編成し、さらにそれを出版することで、それまでの宦蹟図の枠組みを超えたものである。これに対し、『三省備辺図記』は版画という媒体によって明代戦争絵画の新たな局面を切り開いたものと言える。この本は蘇愚が自ら編纂したもので、鄒爾瞻の序文には「公駐鎮都勻、暇日、念曩時助勦之状、乃各為図以紀其事」とあるが、蘇愚は一五八二年貴州にあった時から、福建、広東、貴州三省の辺境における自分の戦功を絵画化し始めたと考えられる。この年の冬、蘇愚は鄒爾瞻に序文を請い、翌年（一五八三）、江西布政使に着任、その夏の五月に自序を記した。このときに板刻も完成していたと考えられる。『三省備辺図記』は、隆慶元年（一五六七）に蘇愚が興泉で軍隊を揃えてから、一五六九年に福建の倭寇、海寇を鎮圧するまで、また一五七二年末から翌年にかけての広東山寇の平定、一五七四年の潮寇平定、さらに一五七九年から一五八一年末にかけての苗族鎮撫、およびその後の陽洞僮人の鎮撫を描く。全体は時系列に従って地域別に編成され、三省の辺境における蘇愚の戦勲を描き、さらにそ

れぞれを倭寇（閩）、海寇（閩）、山寇（粵）、潮寇（粵）、苗（黔）、僮（黔）の平定や鎮撫に細かく分類する。「永安平倭記」が「永寧破倭寇図」と「安海平倭寇図」の二図に対して付されたものである以外は、それぞれ一図一記が交互に並べられる。各小分類の最後には一種の総括として、「平倭寇欽賞図」と「平倭欽賞記」、「有苗來格之図」と「格苗欽賞記」などの、皇帝欽賞の図と記が掲載される。『三省備辺図記』巻末の「撫陽洞欽賞記」は完本でなく頁が欠けているが、全体の構成から見れば、これが最後をしめくくるものであることは明らかである。現在、北京国家博物館が所蔵する孤本『三省備辺図記』は福建の十図、広東の九図、貴州の六図を収録するが、これは元の状態に極めて近いものと言えるのではない。明代文集中の戦勲図と比較すれば、合計二十五図という『三省備辺図記』の戦争図像の数は人目を引くのに十分である。戦争図についての文集の記録は簡略なものが多く、詳細な内容は描写されていないが、先に紹介した「平番図巻」から、おそらくは儀式、行軍、戦闘などの各要素を組み合わせたもの、あるいは個々の要素を単独で取り上げて「出師図」や「凱旋図」としたものがほとんどで、基本的には巻あるいは冊全体で一つの紛争を表していたと推測できる。対照的に、『三省備辺図記』の二十五図に表された蘇愚の戦功は、まず三つの地域に分類され、さらに交戦対象ごとに異なった図式が採用され、その中でいくつかの戦闘に細分化される。このように多層的な分類方式は、明代の戦争図像における新たな変化と言えるだろう。

『三省備辺図記』は、平地倭寇、海寇、山寇、潮寇との戦闘を、場所や対象の種別により四つの図式に分けて描く。いずれの図式にも二つの勢力の激しい戦闘場面が表されている。第一の図式は、「永寧破倭寇図」（図1）、「練兵平倭寇図」など、平地倭寇との戦いを描くものである。これらはいずれも画面中央の平地で、明兵と倭寇の二群に別れた人馬が

左右から中心に向かって激突する図式をとる。周囲には背景として、山石や城壁、その間からのぞく軍旗などが描かれる。数の上で勝る明兵が高く武器を掲げて勇猛に突進する勢いは、身を翻して逃げようとしたり、傷を受けて地面に倒れ込んだりしている倭寇とは対照的である。この対比を通じて、明軍が優位にある戦況が表される。両軍が画面中央に向かつて突進する動感、および彼らの持つ長竿や太刀のような棒状の武器が描く様々な角度の直線は、戦場の騒々しさを強調し、鑑賞者に戦闘の激しさを伝える。また、刀を振るい合う双方の兵士の姿勢、歩兵や騎兵など異なる種類の兵士が入り乱れる様子、激戦のさなかにある兵士とそこに新しく加わっていく倭寇、傷を受けて倒れた倭寇とその首をたたき切ろうとする

明兵の血なまぐさい細部描写によって臨場感が高まり、鑑賞者は戦況を目の当たりにしているような感覚を覚える。第二の図式は、「南嶺破山寇図」（図2）、「九丫樹破寇図」など、山寇の鎮圧を描くものである。第一の図式を応用し、戦場を山中



図1 「永寧破倭寇図」（[明] 蘇愚『三省備辺図記』（北京図書館古籍珍本叢刊）史部・地理類第22冊、據明万曆刻本影印）、頁4b-5a）



図2 「南嶺破山寇図」(『三省備辺図記』、頁41b-42a)



図3 「連澳攻海寇図」(『三省備辺図記』、頁25b-26a)

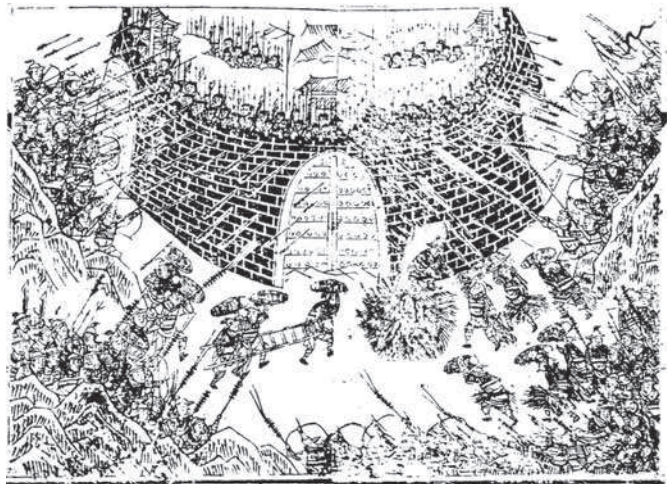


図4 「平潮陽劇寇図」(『三省備辺図記』、頁61b-62a)

に移して、山々の間に兵士の進軍の場面と刀を交えて戦う場面を描き、平地とは異なる戦闘場面を表す。第三の図式は、「漳潮征海寇図」、「連澳攻海寇図」(図3)など、海寇との戦いである。右の角には、通常官服を着た地方官が崖上から戦況を眺めて指揮をとる様子が描かれる。左に広がる海には多くの軍船が浮かぶ。数において勝る明の軍船は、手に武器を持った兵士を乗せて波の間を左方向に進む。先頭の船はすでに倭寇との戦闘を始めており、海寇の船は火を付けられて敗走し、あるいは沈んでいく。画面の端には軍旗のくくりつけられた帆柱が描かれることもあるが、第一、第二の図式で土坡の後ろに見え隠れする軍隊が描かれ

ると同様、これには戦場がさらに広がっていることを暗示する効果がある。第四の図式として挙げられるのは「平潮陽劇寇図」(図4)一図のみだが、城の攻防戦を描く特色ある図式である。画面の中心は門を堅く閉じた円形の城で、城壁の後ろに頭を縮める倭寇とその武器がのぞく。城壁の外には盾を掲げ、壁に向かって矢を放ちながら進んでいく大勢の明兵が描かれ、激しい戦闘が展開している。このように、『三省備辺図記』の戦争図が、「趙適瀘南平夷図」に見られるような簡略な類型表現から抜け出している点に注目したい。また前述した「平番図巻」では、番族を打ち破る山間の景が三度も繰り返されるのに比べ、『三省備

辺図記』ははるかに変化に富み、戦場や交戦対象によって多様な細部描写を使い分け、より生き生きとした戦闘図像を形成している。

『三省備辺図記』では儀式の描写もより複雑なものになっている。「撫越銅鼓諸叛苗図」、「撫叛苗者亞図」では苗族が降伏し貢ぎ物を差し出す場面を描く。これは、過去の戦争絵画にもよく見られる儀式ではあるが、画家はモチーフを付け足すことで、この場面の叙事性を大いに高めている。武器や軍旗を持った大勢の兵士は、軍幕の四方に立つ。官服を着た地方官が二人、その中に座っており、貢ぎ物を入れた器と牛を携え、民を率いた苗族の首領が、軍幕の前にひざまずいて降伏を告げている。人々の傍らには荷物が散乱し、また多くの苗族が遠方から山を越えてこちらに向かつてきている。「趙遙瀘南平夷図」においては、数人が両手の貢ぎ物を將軍に献じているだけの簡単な降伏の場面が、『三省備辺図記』においてはかなり複雑に描写されているのである。また、『三省備辺図記』には新たな儀式も加えられている。「平山寇陞賞図」、「平倭寇欽賞図」などでは反乱が鎮圧された後、中央から使節がやってきて蘇愚に封賞を与える場面が描かれる。画面左には官舎の外から馬に乗ってやってくる皇帝の使者を描き、官舎の内外には、立ち並ぶ兵士や、銅鑼、太鼓を打ち鳴らして封賞を祝う民衆を描く。封賞を受ける蘇愚は庁堂の中央にひかえて、使者が到着するのを待つ。このような昇賞、欽賞の場面は、『三省備辺図記』を通じてほぼ同じ型に倣っているが、多様な図式で描かれる戦闘や降伏の儀式の後に付されて、それぞれの戦争図式を明確に区別する機能がある。

■ 『剿賊図記』

『剿賊図記』を『三省備辺図記』の図式と比べると、戦争図が晩明にさらなる進化を遂げたことがわかる。この書物は玄黙（「玄」は康熙帝

玄燁の諱であるため、清代の文献では「元」黙と表記されることもある）の編集したもので、全部で二十四図あり、崇禎六年（一六三三）の河南彰徳府における高迎祥等衆討伐から、一六三五年春の河南確山県一帯の追討までを時系列に沿って描く。しかし、一六三四年に序文を書いた呉阿衡（？ー一六三八）は、賊の討伐はこの年の春に一段落したと認識していたようである。呉阿衡が「乃公於客夏受事、越仲春而賊已無蹤」と言うのは一六三三年夏から一六三四年春にかけてのことで、玄黙の戦功を総括して「吳城一捷、俾賊不得南下、而南陽亦獲其安」と言っているのは、『剿賊図記』第十六図「剿賊吳城図」に描かれる一六三三年末から一六三四年初めにかけての出来事である。また、呉の序にある「敢并斯言副之剗剗、以並存実録云」という一文から、『剿賊図記』の板刻が一六三四年に計画されていたことを示すが、出版に至ったかどうかは定かでない。その後、玄黙が河南南部まで追討したのに伴い、『剿賊図記』は一六三五年春までの事績を組み込んだ。『明史』には、崇禎八年（一六三五）夏、玄黙は「被逮去、久之得釈、八年卒」とある。また、元克中が「議者乃謂豫撫趙之被逮還都事雖得而白、而公吠不能殺賊、賈志而歿」と述べていることから、『剿賊図記』の完成はおそらく一六三五年、玄黙がこの世を去る前であったことが推測できる。さらに、『剿賊図記』巻末の図記には、「余一面疏請聽洪公指画、一面與撫盧公、并行營諸將、同心戮力、誓大彰國威以收蕩平之績」とあり、この希望に満ちた語氣は逮捕の後のものとは考えにくい。『剿賊図記』はやはり一六三五年の春から夏の間完成したとするのが妥当だろう。ただいざれにせよ、『剿賊図記』が制作されたのは賊の討伐がなお進行している間ということになる。江一桂の死後何年も経ってからその子孫が編纂した『安南來威図冊』、蘇愚が辺境における十余年の自分の戦勲の総括として制作した『三省備辺図記』と比べて、『剿賊図記』の出版は非常に

迅速であると言える。このためには、戦火の中で記を書き、絵画を描かせ、序文を依頼して、板刻させなければならぬ。これは王材が「金門待漏図序」で「自一命以上、拜恩於朝、還旅舎、則必求絵事者貌之」と述べるようなせわしない状況とよく似ており、晩明の出版業の発達と戦勲図制作の流行を物語っているのである。⁽¹⁹⁾

『剿賊図記』は、晩明における戦争図像のさらなる進化を示す作例でもある。『三省備辺

図記』は、戦場と交戦対象に対応したいくつかの図式を用い、細部描写を充満させて戦闘の激しさを描く。『剿賊図記』には、激しい戦闘を描くための型は用いられない。ここでは広々とした山水の景が背景となり、登場人物の数も大幅に減って、その活動が画面中に占める割合も限られるようになる。このように山水表現を重視し、戦闘の細部描写を縮小す

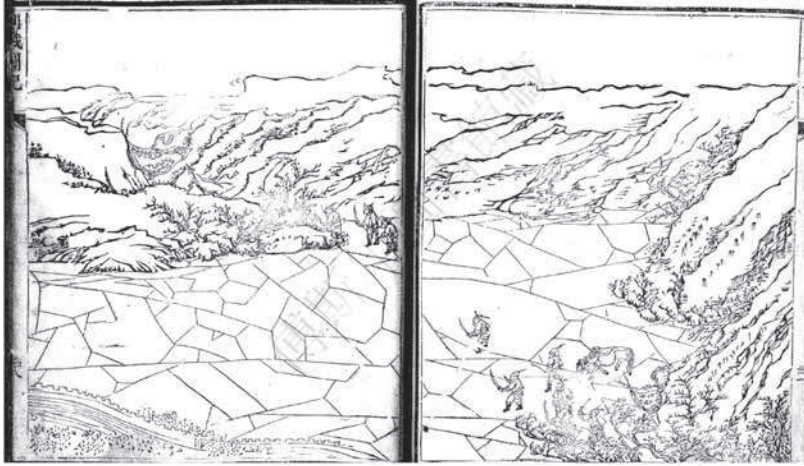


図5 「冰堅賊渡図」〔明〕玄黙『剿賊図記』（中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館藏雍正九年〔1731〕重刊本）、図頁27b-28a)

ることによって、『剿賊図記』の叙事性は弱まっていると言える。⁽¹⁹⁾これは晩明の戯曲挿絵において、人物の背景として庭園ではなく山水が描かれるようになり、結果として叙事性が低下していく傾向と軌を一にする。⁽²⁰⁾また、『剿賊図記』が戦闘の図式という枠組みにとらわれずに、背景描写の個性性を強調している点にも注意が必要だろう。『三省備辺図記』では各図式が形式化した表現になってしまっていたが、『剿賊図記』では山水表現を区別することで、それぞれの戦争の場を描き分けている。ここでは、戦闘が行われた地域とそこでの活動を特定して、個別の戦争図を描き出すことに成功している。例えば、「武林累捷図」では、人物と山脈の大きさを対比させ、数名の兵士が険しい山を登る様子を描く。「河北賊散図」でも同様に人物と山石の対比を通じて、兵士が山の間を探索する場面を描く。「冰堅賊渡図」（図5）は、凍った広い川面を描き、兵士が賊を追ってそこを渡ろうとする場面を表す。『三省備辺図記』では、各戦闘がある図式を用いて表現され、各図の題名も、地名と対象の名前を置き換えるだけの似通ったものが並んでいた。これに対し、『剿賊図記』の各図の題名はより個別的で、それぞれ異なる戦争の場景への興味が反映されている。

小結

辺境での事績や戦争に関係する明代絵画の現存作例は多いとは言えないが、前述した三冊の版本はその変遷や特色の一面を物語っている。『安南来威図冊』は通常の宦蹟図の構成を転換して江一桂の事績を突出させ、『三省備辺図記』はいくつかの異なる戦闘の図式を使用し、『剿賊図記』はそれぞれの戦闘場面の個性性を強調する。このような数十年におよぶ発展の過程とそこから生じた特色ある表現は興味深いものであるし、ここから戦勲図がいかに流行していたかをうかがい知ることができ

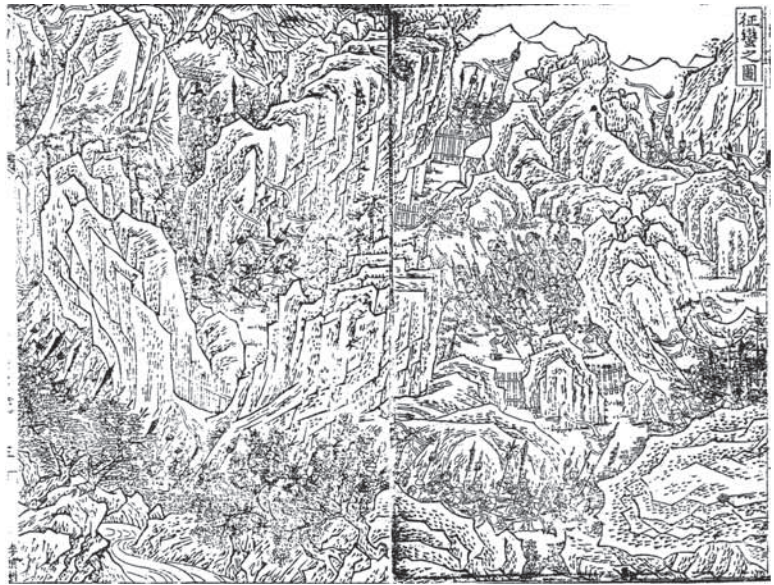


図6 「征蠻之図」(〔明〕雷思忠集、〔明〕曹思彬校正『王公忠勤録』、
図頁2b-3a(收入周心慧主編『新編中国版画史図録 第六冊 明 万
曆版画(三)』北京：学苑出版社，2000，頁222)

るだろう。また、この三冊以外にも、個人の辺境における事績と戦争に
関係する記述を含む書籍の中に挿図を伴うものがある。例えば、万曆
二十年(一五九二)序の『王公忠勤録』には、王重光の「征蠻之図」(図
6)、「撫蛮之図」が付され、天啓三年(一六二三)序の『巡城録』中の
「圍城日録」も、劉錫玄(一五七四?)の「二月初八日西門禦坡上賊、
十六日北城開門殺賊之図」、「十二月初七日王軍門解圍図」などを描く。⁽¹⁵⁴⁾
前者は細部描写が豊富で、『三省備辺図記』に近く、後者は特定の日時

に特定の城を防衛する過程を描いて個別化が図られており、この点で
『剿賊図記』に近い。以上の作例からも、戦争に関係する絵画が明代後
期にさらに活発に制作されていたことがわかる。⁽¹⁵⁵⁾このような同時代の戦
勲を題材にした晩明の版画は、文官の宦蹟図と深い関わりがあり、明代
官員をとりまく視覚文化の一環と言えるのである。

余論

明代戦勲図の制作は宦蹟図と同様、主に官員社会において盛んに行わ
れたが、その影響は官吏の間に留らず、街の商業的絵画工房にも拡大し
ていった。現存する二巻の嘉靖倭寇を描いた画巻、伝仇英「倭寇図巻」
(東京大学史料編纂所蔵)と「抗倭図巻」(中国国家博物館蔵)⁽¹⁵⁶⁾は、おそ
らく胡宗憲の倭寇平定に取材した蘇州片だろう。この二巻の表現は全く
同じとは言えず、東京大学史料編纂所本の端麗な人物描写は仇英の画風
に近く、中国国家博物館本の淡い青緑山水表現は呉派風に属するが、制
作時期はいずれも嘉靖年間よりもやや下った頃と考えられる。あるい
は、万曆年間の豊臣秀吉(一五三七―一五九八)の朝鮮出兵により、嘉
靖年間の倭寇平定への興味が再びかき立てられたことが、晩明の蘇州片
工房による仇英や文徵明などの呉派画家の作品に擬した作品の制作につ
ながったのかもしれない。⁽¹⁵⁷⁾二巻のモチーフや構図はよく似ていて、巻頭
の岸に停泊する倭船から、高い所に肩車をして立ち遠くを眺める倭人、
略奪品を運び民家に火をかける場景、群を成して逃亡する人民、官船と
倭寇の戦闘の盛り上がり、官軍の軍列が整然と城門から進軍してくる巻
末の描写に至るまで、ほとんど同じである。このようによく似たモチー
フと構図を複製していく手法は、晩明蘇州片の間で流行した「清明上河
図」制作のそれに近い。⁽¹⁵⁸⁾二巻のモチーフと構図が同じであること、画風
はやや異なるものの共に晩明蘇州片の範疇に収まることから、いずれも

蘇州の絵画工房で作られた商品であると推測できる。

興味深いのは、伝仇英「倭寇図巻」と「抗倭図巻」の描写内容が、清の張鑑（一七六八—一八五〇）「文徵明画平倭図記」の記述とほぼ一致することである。以下、要約して引用する。

明文徵明画胡梅林平倭図巻、乃揚州阮氏文選樓所藏。雲台師云、「此卷筆蹟不類衡山、且此時衡山年已八十有七、其自署門下文徵明、或即兵部主事楊芷倩衡山生徒所為、以応梅林之索者乎。子其為我考之。」鑑按、此卷高尺有呎、長二丈一尺。卷首書「靖海奇功」四字、「画尾書「紀事」一篇、皆御史張寰所作。中有長興顧箬谿書「海寇篇」。考詩及紀事所載年月、殆記丙辰乍浦梁莊之捷也。…今考圖中一人、貝冑組甲、豐頤而短鬚、按轡乘紫駟馬、一武士執大纛前導、稍次兩武士、一執終葵、一執鉞者、即總督胡宗憲①也。…續谿之右、一官朱衣紗帽、頤雷上微銳、彎眉蠶目、乘青驄並驅而前者、其尚書趙文華②乎。…又其後高冠凹領、朱袍服繡、豐下而須、以其次論之、則巡撫阮鶚③也。…又其後一官、方面左顧、年稍輕者、巡按趙孔昭④也。…其餘文臣四人皆朱衣烏帽、或郎中郭仁、副使劉燾、徐汝、參政汪柏、參議王詢⑤、…此圖中之文職可考者也。其武臣可考者、一將面豐無須、冑而組甲、前擁二旗、旁暨大旗、一上画虎、而翼在胡趙二人後者、疑總兵徐珏⑥。…又一將居前、側身乘紫駟馬、冑首朱甲、執長旗督戰、前五兵手弓矢彎注、又八兵執長鎗前驅轉鬪、則都指揮戴冲霄也。…又一將右視坐船中、前一卒執旗立、將以右手指船頭、首級纍纍然者、疑遊擊尹秉衡⑦等。…尹之左一船稍後、中坐一將弁而朱袍緩帶來獻俘者、通眉豐下、按膝凝視船頭反接而囚者四、此總兵盧鏜⑧也。…又二船橫陣於倭艇之中、十餘人與倭鏖戰、一船首置一佛郎機、一兵俯身然菜繩就放、後一將方面広額、要臬弓箠、左執旗、以右手指麾督戰、此總兵俞大猷⑨也。…一船稍先出、與此

船並後、一將微髭怒目、執黃旗督戰、此或參將丁僅⑩、壁乍浦城以為内援者、不尽可考也。此圖中之武職可考者也。其面縛步行、身纏徽纆而俘者三人、曰徐海之弟也、曰陳東、海之書記也、曰麻葉、海之党也。又一小鹿頭船、船首兩人持篙、一椎髻小童立於篷昔而覘其後、其艇烏篷櫺窗、窗中一女子紅袖擁髻、注目外視、一女子青衫紅裳、相憑而立、不類民人逃竄者、疑妓女翠翹、綠姝⑪也。…其餘兵士有河朔、有永保、有保靖、有容美土兵、故不一律也。吁。画之能事、至此纖悉、與当日情事相合、非苟焉而已。

（*編者注…文中○番号は、図7の①～⑪に対応。）

張鑑の見た作品は文徵明に仮託されており、また、翠翹、綠姝の描写は、二人にまつわる小説や戯曲が嘉靖年間以降に流行したことに関係している⁽¹⁰²⁾。したがって、この阮元（一七六四—一八四九）所藏の「胡梅林平倭図巻」もまた蘇州の絵画工房で作られたものとするのが妥当だろう。この記述を「抗倭図巻」と比較すれば、画中人物をそれぞれ特定することができる（図7①～⑪⁽¹⁰³⁾）。両者は同一系統の蘇州片商品であると言えるだろう。

張鑑の記す「胡梅林平倭図巻」の当初の題名はわからないが、巻首の題「靖海奇功」と記事、海寇篇などは、伝来の過程で付け加えられたものである。張鑑はこれらが絵画の内容と無関係であるとし、この作品を胡宗憲の倭寇平定の戦勲図と見なしている。さらに張鑑はその制作状況を「兵部主事楊芷倩衡山生徒所為、以応梅林之索者乎」と推測しているが、これは前述したように明代の戦勲図が通常部下の主導で制作される状況と符合している。このように、「抗倭図巻」と伝仇英「倭寇図巻」は倭寇を主題にした叙事画であるだけでなく、「胡梅林平倭図巻」と同様、胡少保の倭寇平定を記念する作品であるとも言えるのである。「抗倭図巻」と伝仇英「倭寇図巻」における倭寇と人民の描写は一般の明代

図7 「文徴明画平倭図記」の記述と『抗倭図巻』



①胡宗憲



②趙文華



③阮鶚



④趙孔昭



⑤郭仁・劉燾・徐汝・汪柏・王詢



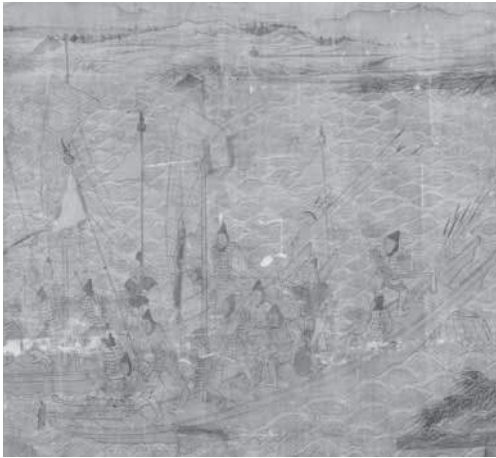
⑥徐珏



⑦尹秉衡



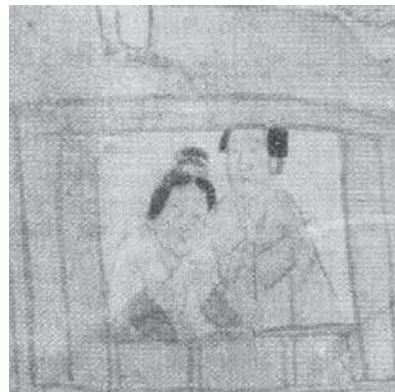
⑧盧鏜



⑨俞大猷



⑩丁燦



⑪翠翹、綠姝

戦勲図よりも豊富である。これは前述した晚明期に再燃した嘉靖倭寇に対する興味の有り様と関係があるのかもしれない。ただ、「平番図巻」において戦争に参加した官員の名前がいちいち標題として書き出されるように、「胡梅林平倭図巻」や「抗倭図巻」においても画中の官員は特定されており(図7①-⑪)、これは文官の戦争図に共通する特徴の一つである。また、「抗倭図巻」と伝仇英「倭寇図巻」にも見られる、中段における明兵と倭寇の激しい戦闘や、巻末の官服を着た官員たちの騎馬行列は、いずれも文官の戦勲図によく見られる表現である。したがって、「胡梅林平倭図巻」、「抗倭図巻」、伝仇英「倭寇図巻」は、いずれも文官の戦勲図に分類され、胡宗憲の倭寇平定の顕彰と関係の深い作例であると結論づけたい。

「胡梅林平倭図巻」、「抗倭図巻」、伝仇英「倭寇図巻」の作例から、官員視覚文化の影響は士大夫のネットワーク内に留まっていなかったことがわかる。辺境の情勢が緊迫していた晩明という時代、官員の戦功を記念する絵画には商業化に向かう潜在的な可能性があった。『安南來威図冊』、『三省備辺図記』、『剿賊図記』に市場の需要があったかどうかは証明できないが、『胡少保平倭戰功』や挿図のある『威南塘剿平倭寇志伝』、『征播奏捷傳通俗演義』、『近報叢譚平虜傳』などには一定の需要があった可能性が高い。

いずれにせよ、明代の官員社会の中で、個人の事績を中心にした戦争図と宦蹟図の制作が流行していたことは事実である。現在出版されている図録に見られるものには形式化した表現が多く、著名な画家が制作に加わることもなかったため、美術史学者がこれらの作品に注目することは他の肖像画に比べて少なかった。しかし、これまで述べてきたように、明代の官員視覚文化についてはさらに研究を進める必要があるだろう。特に宦蹟図、官員の雅集図、画馬などは、当時数多く作られており、内

容も多彩であった。戦争という題材は、伝統的な絵画史では片隅に追いやられていたが、明代になると官員の功績を記念するために欠かせない要素となる。明代における官員視覚文化の興隆を背景に、晩明には地形に応じた激しい戦闘を描くための図式が整理され、さらに個別性を備えた表現へと発展していく。また紛争が多発した晩明という時代において、官員視覚文化は官員社会の枠を越え、商品として市場にも広がっていく可能性を秘める。蘇州片に絵画工房が制作していたのは主に倣古主題であるという過去の認識は修正する必要があるだろう。

個人の功績の絵画化を中心にした官員視覚文化は、明代の発展を経て清代に継承される。例えば、姚啓聖(一六二四-一六八三)の宦蹟と戦勲を記念する『閩頌彙編』、湖広総督が呉三桂(一六一二-一六七八)の討伐に加わった事績を描いた「董衛國紀功図巻」⁽¹⁶⁾、江西総督が江西地方を平定する過程を描く「董衛國紀功図巻」⁽¹⁶⁾などが挙げられる。このように清の初めまで影響力のあった明代戦勲図の流れが清代の間にとのように変化していったのか、乾隆朝(一七三六-一七九五)に作られた徐揚『平定両金川戦図冊』⁽¹⁷⁾のような交戦対象を軸にした戦争図にどのように移行していったのか、これらの問題については稿を改めて論じてみたい。

[注]

(1) 「明」董其昌「容台集」(『四庫禁燬叢刊』集部第三十二冊、據北京大学図書館藏明崇禎三年「一六三〇」董庭刻本影印)巻三、頁三十六a、三十八a-b。

(2) 劉晞儀「董其昌書画鑑藏題跋年表」Wai-kam Ho and Judith G. Smith eds., *The Century of Tung Ch'i-ch'ang* (Kansas City, Missouri: Nelson-Arkins Museum of Art, 1992) pp. 487-575.

- (3) 郭子章の文集には「題平播・經理二図像贊、裂石歌、忠勲祠記」があるが、(2)に言う平播図が、董其昌の題した李化龍「平播冊」であるかどうかはわからない。「明」郭子章撰「清」郭子仁編『青螺公遺書』(台北：中央研究院歷史語言研究所以下、中研院史語所と略称)傳斯年図書館藏清光緒八年「一八八二」冠朝三樂堂本)卷二十八「題、跋、書後」頁十九-二十。Chungは文徵明について論ずる際、その文集に収められた各文章の物質性を強調し、これが書道作品であって、また贈り物としての交換価値があったと言う。同様に董其昌の文集に残る題跋もまた一種の書道作品とみなすことができる。Craig Clunas, *Elegant Debs: The Social Art of Wen Zhengming* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2004).
- (4) しかし、董其昌もまた『民抄董官事実』に名高い悪辣な郷紳である。無名氏『民抄董官事実』(叢書集成統編)第二七八冊、據又滿樓叢書排印)。王守稼、繆振鵬「画壇巨匠、雲間劣紳—董其昌評伝」『東南文化』一九九〇：一(南京、一九九〇)頁一五八-一六五。
- (5) Craig Clunas, *Superfluous Things: Material Culture and Social Status in Early Modern China* (Urbana: University of Illinois Press, 1991). 王鴻泰「雅俗的弁証—明代賞玩文化的流行與士商關係的交錯」『新史学』十七：四(台北、二〇〇六)頁七三-一四三。石守謙「雅俗的焦慮—文徵明、鍾馗與大眾文化」『国立台湾大学美術史研究集刊』十六(台北、二〇〇四)頁三〇七-三四二。
- (6) 例として、Timothy Brook, *The Confusions of Pleasure: Commerce and Culture in Ming China* (Berkeley: University of California Press, 1998). Dorothy Ko, *Teachers of Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China* (Stanford: Stanford University Press, 1994) pp. 59-64. 明清時代の出版については、涂豊恩「明清書籍史的研究回顧」『新史学』二十：一(台北、二〇〇九)頁一八一-二一五を参照。
- (7) 王鴻泰「武功、武学、武芸、武俠—明代士人的習武風尚與異類交游」国立台湾師範大学歴史学系所主催国際シンポジウム「近世中国(九六〇-一八〇〇)的社会與文化」(二〇〇五年十二月十六日-十七日)。また

Kathleen Ryor, "Men and Wu in Elite Cultural Practices during the Late Ming," Nicola Di Cosmo ed., *Military Culture in Imperial China* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2009) pp. 219-242を併せて参照。

- (8) 呉大昕「猝聞倭至—明朝対江南倭寇の知識」(二五五-二一五五四)『明代研究』七(台北、二〇〇四)頁二十九-六十二。呉大昕「海商、海盜、倭—明代嘉靖大倭寇の形象」(南投：暨南国際大学歴史研究所碩士論文、二〇〇一)。
- (9) 石守謙「失意文士の避居山水」『風格與世變』(台北：允晨出版社、一九九六)頁三二八。
- (10) 「明」王世貞『弇州四部稿』(『文淵閣四庫全書』第一二七九-一二八四冊)卷五十「詩部 題邵將軍海上戰功図」頁十a。「明」徐學謨『徐氏海隅集』(『四庫全書存目叢書』集部第二二四-一二五冊、據北京大学図書館藏明万曆五年「一五七七」刻四十年「一六一二」徐文殿重刻本影印)卷二十二「七言絶句 題邵將軍功図有序」頁九a-b。「明」王世懋『王奉常集』(『四庫全書存目叢書』集部第一三三冊、據首都図書館藏明万曆刻本影印)卷十四「詩部 題邵侯戰功冊」頁八b。
- (11) 「明文徵明画胡梅林平倭図卷」の詳しい描写については、「清」張鑑『冬青館集』(『統修四庫全書』集部第一四九二冊、據上海辭書出版社図書館藏民国四年「一九一五」劉氏嘉業堂刻吳興叢書本影印)甲集卷四「文徵明画平倭図記」頁五b1-aを参照。現在東京大学史料編纂所と中国国家博物館に所蔵されている「倭寇図巻」と「抗倭図巻」との関わりについては後述する。前者は仇英『倭寇図巻』(東京：近藤出版社、一九七四)を、後者は中国国家博物館編『中国国家博物館藏文物研究叢書 絵画巻 歴史画』(上海：上海古籍出版社、二〇〇六)頁五十四-六十七をそれぞれ参照。
- (12) 「明」周楫纂、陳美林校注『西湖二集』(台北：三民出版社、一九九八)卷三十四、頁六八八-七一一。清初の『胡少保平倭記』は『西湖二集』から再編したものである。「清」錢塘西湖隱叟『胡少保平倭記』(上海：上海古籍出版社、據上海圖書館藏鈔本影印、一九九〇)。明代の小説の題

- 材として倭寇が登場するのは、時事小説の流行とも関係している。ただ時事小説の定義については論争がある。陳大康『明代小説史』（北京：人民文学出版社、二〇〇七）頁五八〇―六一三。張平仁『明末清初時事小説考訂』『古籍整理研究學刊』二〇〇四・二（長春、二〇〇四）頁二十九―三十二。陳大道『明末清初「時事小説」的特色』『小説戲曲研究第三集』（台北：聯經出版社、一九九〇）頁一八一―一二二〇を参照。小説以外に、晩明の時事戯の発展も興味深い。巫仁恕『明清之際江南時事戯の発展及其所反映の社会心態』『中央研究院近代史研究所集刊』三十一（台北、一九九九）頁一―四十八を参照。馬孟晶氏のご教示に感謝いたします。
- (13) 馬雅貞『戰爭圖像與乾隆朝（一七三六―一九五）对帝国武功之建構——以『平定準部回部得勝圖』為中心』（台北：国立台湾大学藝術史研究所碩士論文、二〇〇〇）。
- (14) 「明」宋濂『題李弘利伐苑圖』〔清〕清聖祖勅輯『御定歷代題畫詩』（中國書畫全書）第九冊、上海：上海書畫出版社、一九九二―一九九九）頁二二六參照。
- (15) 「明」蔡潮『霞山文集』（台北：中研院史語所傅斯年圖書館據東京內閣文庫藏明刊本影印、一九九〇）卷三「貴陽詩稿 題陳總兵百戰圖二首用正韻一頁十 a・b。
- (16) 「明」林弼『林登州集』（『文淵閣四庫全書』第一二二七冊）卷五「七言律詩 題張將軍百勝圖」頁一 b。
- (17) 「明」韓雍『襄毅文集』（『文淵閣四庫全書』第二二四五冊）卷二「七言古詩 凱旋圖為總兵官彭武伯楊公題」頁八 a・九 b。
- (18) 「明」王世貞『弇州四部稿』卷五十一「詩部 題邵將軍海上戰功圖」頁十 a。
- (19) 「明」公鼐著、趙広升点校『問次齋稿』（北京：中国戲劇出版社、二〇〇八）頁一一三。
- (20) 「明」何喬遠『鏡山全集』（台北：中研院史語所傅斯年圖書館據東京內閣文庫藏明崇禎十四年「一六四二」刊本影印、一九八〇）卷七「詩 大海波寧圖為沈將軍賦」頁八 b・九 a。
- (21) 「明」王邦瑞『王襄毅公集』（台北：国家圖書館藏明隆慶五年「一五七二」湖広按察使温如春刊本）卷九「凱旋圖序」頁二十三―二十六。
- (22) 「明」徐階『少湖先生文集』（『四庫全書存目叢書』集部第八十冊、據天津圖書館藏明嘉靖三十六年「一五五七」宿応麟刻本印）卷五「凱旋圖頌」頁六 a・七 a。
- (23) 「明」張瀚『奚囊蠹餘』（『四庫全書存目叢書』集部第一〇一冊、據中山大学圖書館藏明隆慶六年「一五七二」刻本影印）卷十三「出師禦敵圖記」頁九 b・十 a。
- (24) 「明」范欽『天一閣集』（『統修四庫全書』集部第一三四一冊、據寧波市天一閣博物館藏明万曆刻本影印）卷二十二「劉觀察出師圖序」頁一 a・三 b。
- (25) 「明」黄克晦『吾野詩集』（『四庫全書存目叢書』集部第一八九冊、據復旦大學圖書館藏清乾隆二十五年「一七六〇」黄隆恩刻本影印）卷三「題嶺海昇平圖壽殿中丞」頁六十八 a・b。
- (26) 「明」丁啓濬著、「明」丁楷輯『平圃詩集』（台北：中研院史語所傅斯年圖書館據日本內閣文庫藏明崇禎十四年「一六四二」刊本影印、一九九二）卷一「題熊心開中丞閩海昇平圖」頁二十八―二十九。
- (27) 「明」何孟春『何文簡公集』（台北：国家圖書館藏據明万曆二年「一五七四」永州府同知邵城刊丁亥湯日昭增補本）卷十「臨戎決勝圖序」頁三十一 a・b。
- (28) 「明」張佳胤『居來先生集』（『四庫全書存目叢書』補編第五十一冊、據中国科学院圖書館藏明万曆刻本影印）卷三十六「大司馬大總制範溪鄭公制虜圖序」頁一 a・四 a。
- (29) 「明」楊一清『石淙文集』陳子龍等編『明經世文編』（『統修四庫全書』集部第一六五六―一六六二冊、據明崇禎平露堂刻本影印）卷一八「朱憲副平賊圖記」頁十七 a・十九 b。
- (30) 「明」鄧原岳『西樓全集』（『四庫全書存目叢書』集部一七三―一七四冊、據福建省圖書館藏明崇禎元年「一六二八」鄧慶棠刻本影印）卷十二「西平圖詠序」頁六 b・八 a。
- (31) 「明」李堂『葦山文集』（『四庫全書存目叢書』集部第四十四冊、據北京大學圖書館藏明嘉靖刻本影印）卷五「平蛮奏凱圖為司徒王公賦」頁十一

- a.
- (32) [明] 徐階『少湖先生文集』卷五、頁六a-b。
- (33) [清] 陳用光『太乙舟詩集』(『續修四庫全書』集部第一四九三冊、據湖北省圖書館藏清咸豐四年「一八五四」孝友堂刻本影印) 卷四「丙寅十二月十九日小峴先生作東坡生日因得觀其八世祖舜峰先生會試硃卷及凱還圖画像丁卯元旦夜作七古一首」頁三a-四a。
- (34) [明] 楊一清『石淙文集』(陳子龍等編『明經世文編』卷一八)「朱憲副平賊圖記」頁十七a-十九b。
- (35) [明] 張佳胤『居來先生集』卷三十六「大司馬大總制範溪鄭公制虜圖序」頁一a-四a。
- (36) [明] 范欽『天一閣集』卷二十二「劉觀察出師圖序」頁一a-三b。
- (37) [明] 王邦瑞『王襄毅公集』卷九「凱旋圖序」頁二十三-二十六。
- (38) 図版は中国国家博物館編『中国国家博物館藏文物研究叢書 絵画卷 歴史画』頁二十八-五十一を参照。
- (39) [清] 張廷玉等撰、鄭天挺点校『明史』(北京:中華書局、一九七四) 卷三三〇「列伝 西番諸衛 安定衛 阿端衛 曲先衛 赤斤蒙古衛 沙州衛 罕東衛 罕東左衛 哈梅里」頁八五四六-八五四七。
- (40) 中央研究院歷史語言研究所校勘『明神宗實錄』(台北:中央研究院歷史語言研究所、一九六六) 卷十七、万曆元年九月庚寅条、総頁四九八。
- (41) [明] 劉伯燮『鶴鳴集』(『四庫未收書輯刊』伍輯第二十二冊、據明万曆十四年「一五八六」鄭懋洵刻本影印) 卷二十七「雜文 平番圖跋」頁十二b-十三a。
- (42) 伝李公麟「免胄図卷」、伝「遼」陳及之「便橋會盟図卷」。前者の図版は国立故宮博物院編『故宮書畫図録』(台北:国立故宮博物院、一九八九) 第十五冊、頁二八九-二九四。また藤田美術館本が貝塚茂樹等編輯『文人画粹編 董源 巨然』(東京:中央公論社、一九七五) 図六十六に紹介される。後者は余輝主編『故宮博物院藏文物珍品四 元代絵画』(香港:商務印書館、二〇〇五) 図一六、三三-二四一。余輝「陳及之便橋會盟図考弁兼探民族学在鑑析古画中的作用」『故宮博物院院刊』一九九七:一(北京、一九九七) 頁十七-五十一を参照。
- (43) [明] 蘇愚『三省備辺図記』(『北京図書館古籍珍本叢刊』史部地理類第二十二冊、北京:書目文獻出版社據明万曆刻本影印) 頁八七七-九四一。『三省備辺図記』については本稿第三節を参照。
- (44) 姜一涵「十二世紀の三幅無名款山水故実画(上)(下)」『故宮季刊』十三:四、十四:一(台北、一九七九) 頁二十五-五十三、四十五-五十七。Lawrence Sickman and Kwan-shut Wong, "Chao Yü's Pacification of the Barbarians South of Lü by a Sung Artist," *Wai-kam Ho and Sherman E. Lee, Eight Dynasties of Chinese Painting: the Collections of the Nelson Gallery-Atkins Museum, Kansas City, and the Cleveland Museum of Art* (Cleveland, Ohio: Cleveland Museum of Art in cooperation with Indiana University Press, 1980), pp. 37-41. 林莉娜「千載寂寥、披図可鑑—宋人画趙孟頫南平夷図新探」『故宮文物月刊』八:五(台北、一九九〇) 頁十一-二十七。傅熹年「訪美所見中国古代名画札記(下)」『文物』七(北京、一九九三) 頁七十三-八十(傅熹年「傅熹年書画鑑定集」鄭州:河南美術出版社、一九九九、頁八十一-九十七に再録) Maxwell Hearn, "Painting and Calligraphy under the Mongols," James C. J. Watt et al., *The World of Kubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasties* (New York: The Metropolitan Museum of Art, 2010), pp. 211-213 参照。
- (45) 『六安州志』(『光緒』『安徽通志』(『中国省誌彙編』冊三、台北:華文出版社據清光緒三年「一八七七」重修本影印、一九六七) 卷二六三「人物志 方技」頁二二aより引用。
- (46) たとえば「玉茗堂批點皇明開運輯略武功名世英烈伝」の「徐元帥大破帖木兒」、「玉茗堂批點皇明開運輯略武功名世英烈伝」(台北:国家図書館 據明崇禎元年「一六二八」刊本) 卷二「徐元帥大破帖木兒」頁四b-五a。
- (47) [明] 蘇愚『三省備辺図記』「序」頁八a。
- (48) [宣統]『固原州志』(台北:成文出版社據清宣統元年「一九〇九」刊本影印、一九七〇) 卷二「地輿志 疆域 城池」頁六b。
- (49) [宣統]『固原州志』卷二「地輿志 疆域 城池」頁五十五b-五十六a。
- (50) [宣統]『固原州志』卷一「図説」頁四十二a。

- (51) 「宣統」『固原州志』卷一「図説」頁四十一 a。
- (52) 「宣統」『固原州志』卷八「芸文志 記」頁五十六 a。
- (53) 「宣統」『固原州志』卷二「地輿志 疆域 城池」頁二十一 b—二十二 a。
- (54) 清代晚期の地方志は「大校場、在州城東南郊太白山下。地極宏闊、下環清水河、繫抱如帶。宮門屹立、中建演武序五楹、並閱射樓一座、樓称高峻」と言う。望軍樓はあるいは校場の一角に建てられた閱射楼であるかもしれない。「宣統」『固原州志』卷一「図説」頁四十一 a。
- (55) 「宣統」『固原州志』卷一、頁四十二 a。
- (56) 「宣統」『固原州志』卷十「芸文志 碑類」頁十四 b。
- (57) 「万曆」『固原州志』（北京図書館蔵明万曆四十四年「二六一六」刊本）卷上「官師制」頁三十六。
- (58) 「宣統」『固原州志』卷二「地輿志 疆域 城池」頁五十二 b—五十三 a。
- (59) 「万曆」『固原州志』卷上「官師制」頁三十五。
- (60) 「宣統」『固原州志』卷二「地輿志 疆域 城池」頁五十二 b—五十三 a。
- (61) 後楽亭と范仲淹の持つ文武のイメージとの関係については李卓穎氏に教示していただいた。ここに感謝の意を表します。
- (62) 図版は中国国家博物館編『中国国家博物館蔵文物研究叢書 絵画卷 歴史画』頁二十一参照。
- (63) この画冊は「恩榮百紀」と題されているが、現在残っているのは三分の一に満たない。図版の一部は中国古代書画鑑定組編『中国古代書画図目』（北京・文物出版社、一九八六）参照。特別観覧を許可してください。中国首都博物館保管組主任、武俊玲氏のご協力に感謝いたします。
- (64) 「明」駱徒字「澹然齋存稿」（台北・国家図書館蔵據明崇禎十年「二六三七」武康駱氏原刊本）卷一「詠徐大夫素履十二図」頁三十四 a—三十七 b。
- (65) 「清」黄彭年『陶樓文鈔』（統修四庫全書 集部第一五五二—一五五三冊、據復旦大学図書館蔵民国十二年「一九二二」章鈺等刻本影印）卷十一「題明范文忠公画像并宦蹟図」頁二 a—八 b。
- (66) 軍服姿は、現存作例の中では、北京故宮所蔵の「張瀚宦蹟図卷」両巻に一図ずつ描かれているのみである。その内の一図に書かれた「余亦批執較閱」という自題は、その特殊性を強調する。ほかの場所では、張瀚は文官の官服を着た姿で表されており、文官の軍服姿を描くこの二図が特例であることがわかる。部分図版は、楊新主編『故宮博物院蔵文物珍品全集八 明清肖像画』（香港・商務印書館、二〇〇八）頁二十四—三十一を参照。また、宦蹟をめぐる絵画の制作の主導者についても、戦勲図と同様の傾向が認められ、本人以外に、部民や幕僚が作らせたものがある。「郡邑諸大夫相與召画史写君状貌為瓊林春意図」はその一例。「明」周瑛『翠渠摘稿』（文淵閣四庫全書 第一二五四冊）卷一「瓊林春意図序」頁四 b—五 b。
- (67) 楊麗麗「一位明代翰林官員的工作履歷——徐頭卿宦迹図圖像簡析」『故宮博物院院刊』二〇〇（北京、二〇〇五）頁六十三。この図については、朱鴻「徐頭卿宦迹図研究」『故宮博物院院刊』一五四（北京、二〇一〇）頁四十七—八十も参照。
- (68) 例えば「雲衡履歷図」がある。「明」辺貢『華泉集』（文淵閣四庫全書 第一二六四冊）卷九「文集 雲衡履歷後序」頁八 a—九 a を参照。ほかに「明」劉春『東川劉文簡公集』（統修四庫全書 集部一三三二冊、據北京図書館蔵明嘉靖三十三年「一五五四」劉起宗刻本影印）卷七「都憲王公履歷図序」頁二 a—三 b、また「蒲州集」二本、…係明陳緒撰、…卷八「楊南海履歷図序」。「清」姚觀元『清代禁毀書目四種』（統修四庫全書 史部第九二一冊、據上海辭書出版社圖書館蔵清光緒十年「二八八四」刻進齋叢書第三集本影印）など。また晚清の唐鶴安題「孫峰溪余憲雲山履歷図」があるが、孫氏の『雲山履歷稿』に依拠するものかどうかはわからない。「清」葛嗣澎『愛日吟廬書画統録』（統修四庫全書 子部第一〇八八冊、據清宣統二年「一九一〇」葛氏刻本影印）卷八「郷先哲遺墨」頁一 a。
- (69) 例えば「宦途履歷図詩」がある。「明」丘濬『瓊台會稿』（叢書集成三編 文学類第三十八—三十九冊、據「丘文莊公叢書」本影印）卷十「宦途履歷図詩序」頁三十 b—三十二 a を参照。
- (70) 例えば「題王頭宗巡歴図」。「明」貝瓊『清江詩集』（文淵閣四庫全書 第一二二八冊）卷八「題王頭宗巡歴図」頁十五 b 参照。

- (71) 例えば「少保雨川葛翁行歴図像序」。「明」王世貞『弇州四部稿』巻六十九「文部 少保雨川葛翁行歴図像序」頁八a—10b参照。また康熙年間の張貞「丁野鶴先生行歴図記」は、丁耀元（一五九九—一六六九）自筆の「行歴一卷」を記載するが、これはおそらく明代の用法を踏襲したものであろう。「清」張貞『杞田集』（『四庫未收書輯刊』柒輯第二十八冊、據清康熙四十九年「一七一〇」春岑閣刻本影印）巻四「丁野鶴先生行歴図記」頁1a—1b参照。
- (72) 「明」鄒守益『王陽明先生図譜』（『四庫未收書輯刊』肆輯第十七冊、據清鈔本影印）頁四六八—四八五。
- (73) これは年譜、特にある人物の生涯に起きた出来事を時系列に並べる自叙年譜と関係がある。自叙年譜については、Pei-yi Wu, *The Confucian's Progress: Autobiographical Writings in Traditional China* (Princeton: Princeton University, 1989), pp. 32-41を参照。このような方法は、歴史上の偉大な人物、釈迦や孔子の生涯を表した『釈氏源流』や『聖蹟図』の型の応用と言える。『王陽明先生図譜』もこの種のものに近い。『聖蹟図』に関しては、許瑜翎「明代孔子『聖蹟図』研究—以伝世正統九年本『聖蹟図』を中心」(台北：国立台湾師範大学美術研究所中国美術史組碩士論文 11010) Julia Murray, *Mirror of Northby: Chinese Narrative Illustration and Confucian Ideology* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2007) を参照。
- (74) 「明」駱徒宇『澹然齋存稿』巻一「詠徐大夫素履十二図」頁三十四a—三十七b。
- (75) 「明」劉伯燮『鶴鳴集』巻十三「七言雜体 江陵劉侍御四美冊」頁九a—10b。
- (76) 「明」呉玄扆『雁蕩山樵詩集』（台北：故宮博物院據北京圖書館藏明嘉靖三十五年「一五五六」樂清呉氏家刊本）巻十一「宦游紀勝雜題為唐大參賦」頁九—十一。このような明代の宦遊図は、主に仕官遊歴の風景をめぐって描写が展開する清代の張宝（一七六三—一八三二）『泛槎図』や麟慶（一七九二—一八四六）『鴻雪因緣図記』とは異なっている。「清」張宝『泛槎図』（北京：北京古籍出版社、一九八八）、范白丁『鴻雪因緣図記』成書考』『新美術』二十九（北京、二〇〇八）頁四十四—四十八参照。ただし、清代にも、『阿克敦奉使図』のように、明代の作例と同様、まず金門待漏の場面（後で詳述）、続いて朝鮮への派遣使節の景を描くものがある。図版は阿克敦著、黄有福、千和淑校註『奉使図』（瀋陽：遼寧民族出版社、一九九九）参照。
- (77) 「清」黄彭年『陶樓文鈔』巻十一「題明范文忠公画像并宦蹟図」頁2a—8b。
- (78) 「清」陸心源『穰梨館過眼録』（『続修四庫全書』子部第一〇八七冊、據清光緒十七年「一八九二」呉興陸氏家塾刻本影印）巻二十二「張恭懿公宦蹟図卷」頁2a—21b。
- (79) 「明」李濂『高渚文集』（『四庫全書存目叢書』集部第七十一—七十一冊、據杭州大学図書館藏明嘉靖刻本影印）巻十四「七言古詩三 題儲御使四図」頁21b—213b。
- (80) 行楽図については、Cheng-hua Wang, "Material Culture and Emperorship: The Shaping of Imperial Roles at the Court of Xuanzong (r. 1426-35)," Ph.D. diss., New Haven: Yale University, 1998, pp. 216-221. Hui-chi Lo, "Political Advancement and Religious Transcendence: The Yongzheng Emperor's (1678-1735) Deployment of Portraiture," Ph.D. diss., Stanford: Stanford University, 2009, pp. 521を参照。
- (81) 「明」駱徒宇『澹然齋存稿』巻一「詩 詠徐大夫素履十二図」頁三十四a—三十七b。
- (82) 「雲衡履歷図序」は「其事可以紀者二十四条：其図属乎親者六、属乎師者一、属乎君者十有七、他不與焉。」と云う。「明」辺貢『華泉集』巻九「文集」頁8a—9a。
- (83) 「明」許成名『龍石先生詩抄』（台北：国家図書館藏明万曆三年「一五七五」聊城丁氏芝城刊本）巻一、頁九—十。
- (84) 「明」周倫『貞翁淨稿』（『四庫全書存目叢書』集部第五十一冊、據蘇州市圖書館藏明嘉靖三十七年「一五五八」周鳳起刻本影印）巻七「省辺図二首」頁7a。
- (85) 「奉命巡按雲南、居歲餘、戎夷安之」。「明」沐昂『素軒集』（『続修四庫

- 全書」集部第一三二九冊、據南京圖書館藏明刻本影印) 卷十一「驄馬觀風図序」頁十一b—十二b。
- (86) 「明」薛瑄『河汾詩集』(『四庫全書存目叢書』集部第三十二冊、據北京圖書館藏明成化五年「一四六九」謝廷桂刻本影印) 卷五「七言律詩 題恩県行台屏風画使者觀風図」頁三十一a。
- (87) 「明」莫如忠『崇蘭館集』(『四庫全書存目叢書』集部一〇四—一〇五冊、據中国社会科学院文学研究所藏明万曆十四年「一五八六」馮大受董其昌等刻本影印) 卷十八「雜著 觀風図詠冊」頁四a—五b。
- (88) 「明」俞允文『仲蔚先生集』(『四庫全書存目叢書』集部一四〇冊、據北京大学圖書館藏明万曆十年「一五八二」程善定刻本影印) 卷十「侍御使八閩陳公德政図序」頁七a—八b。
- (89) 「明」楊干庭『楊道行集』(『四庫全書存目叢書』集部一六八—一六九冊、據原北平圖書館藏明万曆刻本影印) 卷六「七言歌行 留犢図寄贈樊使君」頁二十八a—b。
- (90) 「明」徐階『少湖先生文集』卷三「記類 觀闕榮還図記」頁二十二b—二十四a。
- (91) 「明」康海『對山集』(『四庫全書存目叢書』集部第五十二—五十三冊、據北京師範大學圖書館藏明嘉靖二十四年「一五四五」吳孟祺刻本「卷八 卷九配鈔本」影印) 卷十「送別少司徒張公督餉北還図詩序」頁十五a—十六b。
- (92) 「明」陸鈇『春雨堂稿』(台北：漢学研究中心據日本尊經閣文庫藏明弘治年間刊本影印) 卷五「記」頁八a—b。また「明」李東陽『懷麓堂集』(『文淵閣四庫全書』第一二五〇冊) 卷十「詩稿十 題傳日川修撰日会中書兄弟趨朝図」頁二十一a—b。
- (93) 「明」焦竑『焦氏澹園集』(『四庫禁燬書叢刊』集部第六十一冊、據中国科学院圖書館藏明万曆三十四年「一六〇六」刻本影印) 卷四十二「七言律詩 徐吏部父子朝天図」頁九b。
- (94) 「明」元思謙『慎修堂集』(『四庫未收書輯刊』伍輯第二十一冊、據明万曆詹思虞刻本影印) 卷三「賦頌 面思図頌有序」頁三a—五b。
- (95) 「明」林文俊『方齋存稿』(『文淵閣四庫全書』第二二七一冊) 卷六「恩遇図序」頁三十二b—三十三b。
- (96) 毛紀「一四六三—一五四五」自以位登台輔、全節完名、製為四朝恩遇図一冊、凡十有六幀。「清」永瑆『四庫全書總目』(『文淵閣四庫全書』第二冊) 卷六十四「吏部二十」頁六b—七a。
- (97) 明代には文官の省親制度が発達していた。趙克生「明代文官の省親和展墓」『東北師大報』一三三二(長春、二〇〇八) 頁十七—二十三。
- (98) 「明」薛瑄『河汾詩集』卷五「七言律詩 題楊僉憲潤思親卷」頁三十b。
- (99) 「明」韓經『恆軒遺稿』(台北：國家圖書館藏正統間刊本) 卷一「七言律詩 題宦遊思親卷」頁十三a。
- (100) 「明」張悅『定菴集』(『四庫全書存目叢書』集部第三十七冊、據上海圖書館藏明弘治十七年「一五〇四」刻本影印) 卷一、頁七十三b—七十四a。
- (101) 「楊給事婦慶図」、「曰此吾婦慶図、吾繫官於京三年、每思及吾親初度之辰、婦以慶焉而不得也、將寓此以為壽」。「明」何孟春『何文簡公集』卷九「序上」頁十二a。
- (102) 「明」陸鈇『春雨堂稿』卷五「記」頁八a—b。また「明」李東陽『懷麓堂集』卷十「詩稿十 題傳日川修撰日会中書兄弟趨朝図」頁二十一a—b参照。
- (103) 「明」倪岳『青溪漫稿』(『文淵閣四庫全書』第一二五一冊) 卷二「七言古詩 題傳日川日会雁行待漏像図限韻短歌」頁二十一a—b。
- (104) 「明」林大春『井丹先生集』(台北：中研院史語所傅斯年圖書館據日本宮内庁書陵部藏明万曆十九年「一五九一」刊本影印、一九九〇) 卷十七「雜著」頁二十七a—二十八a。
- (105) 図版は楊新主編『故宮博物院藏文物珍品全集八 明清肖像画』頁六十三参照。
- (106) 「明」王材『念初堂集』(台北：中研院史語所傅斯年圖書館據東京内閣文庫藏清雍正五年「一七二七」正氣堂重刊本影印、一九九〇) 卷十四「序」頁十b—十二a参照。
- (107) 「明」王畿『楞全集』(『四庫全書存目叢書』集部第一七八冊、據清華大學圖書館藏清乾隆二十四年「一七五九」王宗敏刻本影印) 卷二「賤歴図跋」『賤歴図譜引』頁十三a—十五a。

- (108) 「明」王材『念初堂集』卷三「賦 誌窮卷四図」頁十a-b。最初に描かれたのは三件の事績のみで、当初は「三窮図」と呼ばれていたらしい。同時代の題跋が数多く残っている。例えば「明」鄒守益「三窮図問答」『東廓鄒先生文集』(『四庫全書存目叢書』集部第六十五-六十六冊、據北京大學圖書館藏清刻本影印) 卷一「序類」頁三十九b-四十一a。
- (109) 戦争図には明代以前からの伝統があり、文官に無関係の作例も散見される。宦蹟図と関係する題材もまた官員が独占していたわけではなから。例えば明初の「題甘肅軍人思親図」は必ずしも宦蹟図の影響を受けていない。「明」蕭儀『襪線集』(『四庫全書存目叢書』集部第三十一冊、據江西省圖書館藏清乾隆五年「一七四〇」重刻本影印) 卷十三「五言律 題甘肅軍人思親図」頁三b。
- (110) 趙前「明司札監刻本『賜号太和先生相贊』初探」『紫禁城』五(北京、二〇〇五) 頁一〇四-一一一。
- (111) 「明」黃綰「久庵先生文選」(台北: 漢学研究センター、據日本尊経閣文庫蔵 明万曆刊本影印) 卷四「七言絶句 題晏太監行辺図」頁五a。
- (112) 「先伯祖妣趙淑人朝孝節烈皇后、孝哀愍皇后、因而伝写者也」。「清」朱彝尊『曝書亭集』(『文淵閣四庫全書』第一三二七-一三二八冊) 卷五十四「跋十三 題趙淑人宮門待漏図」頁十五b-十七b。
- (113) 「五同会図」と「同年図」については、蘇玫璋「從明代官員雅集図看明代雅集図及群像肖像的發展」(台北: 國立台灣師範大學美術研究所中國美術史組碩士論文、二〇一〇) 参照。
- (114) Sung Hounmei, "The Symbolic Language of Chinese Horse Painting," *National Palace Museum Bulletin* 36:2 (July, 2002), pp. 62-73. 同氏, *Decoded Messages: The Symbolic Language of Chinese Animal Painting* (New Haven: Yale University Press, 2009), pp. 171-206. 再録。
- (115) 「送寇公去任図」については、馬雅貞「中介於地方與中央之間——『盛世滋生図』的雙重性格」『國立台灣大學美術史研究集刊』二十四(台北、二〇〇八) 頁二八七-二八九を参照。
- (116) 王正華氏は「杏園雅集図」は正統年間の初めに、宣德帝の時代の出来事を描いたもので、永樂朝の文化を受け継ぎ、皇帝と高官、宮廷画家の
- 交流を奨励する宣徳朝独特の宮廷文化を反映していると指摘する。Kathryn Liscomb 氏もまた、高官がパトロンとなって作らせた永樂朝の祥瑞図などは、当時の特殊な政治文化を反映していると言う。両者の研究によつて、明初の高官をめぐる絵画制作と当時の特殊な宮廷文化との関係が明らかになったが、本稿で論ずる明代中期以降の中高級官員をめぐる視覚文化とは異なる性質を持つ。Cheng-hua Wang, "Material Culture and Emperors: The Shaping of Imperial Role at the Court of Xuanzong," Ph.D. diss., Yale University, 1998, pp. 340-347. Kathryn Liscomb, "Foregrounding the Symbiosis of Power: A Rhetorical Strategy in Some Chinese Commemorative Art," *Art History* 25:2 (April 2002), pp. 135-161
- (117) Sung Hounmei, "The Symbolic Language of Chinese Horse Painting," pp. 62-73. 同氏, *Decoded Messages: The Symbolic Language of Chinese Animal Painting*, pp. 171-206.
- (118) 明代の多元的な視覚文化については、Craig Clunas, *Empire of Great Brightness: Visual and Material Cultures of Ming China, 1366-1644* (London: Reaktion Books, 2007), Craig Clunas, *Pictures and Visibility in Early Modern China* (London: Reaktion Books, 1997) を参照。
- (119) 明清の科挙文化については、Benjamin A. Elman, *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China* (Berkeley, California: University of California Press, 2000) を参照。
- (120) 「明」王材『念初堂集』卷十四「金門待漏図序」頁十b-十一a。
- (121) 「明」王畿『樗全集』卷二「賤歴図跋」「賤歴図譜引」頁十三a-十五a。
- (122) 「明」劉春『東川劉文簡公集』卷七「都憲王公履歴図序」頁二a-三a。
- (123) 「明」劉伯燮『鶴鳴集』二十七「雜文 平番図跋」頁十二b-十三a。
- (124) 安南事件においては明側が恭順を求めることで事態が収拾したため、『安南來威図』には戦闘描写がない。しかし恭順を求めることも広義の意味では軍事の一環であり、投降の受諾も明代戦勲図とは不可分の要素であるため、ここでは戦勲図として論じることとする。
- (124) 後述するが、晩明には宋人の戦功を描いた絵画(報功図、注一五五參

照)や同時代の戦争を記録する刊本(『王公忠勤録』と『巡城録』)があり、これにも戦勲の挿図が含まれている。しかしここに挙げた『安南来威図』、『三省備辺図記』、『剿賊図記』は、現存する同時代の戦争を主題にした刊本の中で、特に「図」と題するものであり、この三冊において挿図は重要な位置を占めていたと考えられる。このため、ここでは特にこれらを取り上げる。

- (125) 「明」馮時暘、「明」梁天錫、「明」江美中輯撰『安南来威図冊』(『北京図書館古籍珍本叢刊』史部雜史類第十冊、據明隆慶刻本影印)頁三七三—四七九(この刊本は原本の頁番号に混乱があるので、影印本が新しく付した頁番号に従う)。またKathlene Baldanzaは、『安南来威図冊』を含む中国とベトナムの史料を比べ、安南事件に関する記述の相違を論ずる。Kathlene Baldanza, 'The Ambiguous Border: Early Modern Sino-Viet Relations,' Ph. D. diss., Philadelphia: University of Pennsylvania, 2010, Chapter Four.
- (126) 凌瑄は嘉靖壬戌(一五六二)の進士である。伝記については、「明」過庭訓纂集『明分省人物考 四』(周駿富輯『明代伝記叢刊』第一三二冊)頁四三一—四三二。「明」馮時暘、「明」梁天錫、「明」江美中輯撰『安南来威図冊』頁四三〇—四三二を参照。
- (127) 「明」馮時暘、「明」梁天錫、「明」江美中輯撰『安南来威図冊』頁三七五—三七六。
- (128) 例えば、「白石先生像贊」や「白石先生小像」、雲南への出使を命じる嘉靖帝の勅令は目録には記されない。「明」馮時暘、「明」梁天錫、「明」江美中輯撰『安南来威図冊』頁三七七—三七九。
- (129) 「清」張廷玉等『明史』卷九十七「志七十三」頁二三八四。「清」黄虞稷『千頃堂書目』(『文淵閣四庫全書』第六七六冊)卷五、頁十二b—十三a。
- (130) 「明」嚴從簡『殊域周咨録』(『統修四庫全書』史部第七三五—七三六冊、據北京図書館藏明万曆刻本影印)卷六「安南下」頁三十八a—三十九b。「明」沈懋孝『長水先生文鈔』(『四庫禁燬書叢刊』集部一五一—一六〇冊、據中国科学院図書館南京図書館藏明万曆刻本影印)「四餘編」頁十六a—

十七b。

- (131) 『明穆宗実録』卷三、隆慶元年一月壬午条、総頁九十。
- (132) 『明世宗実録』卷三〇二、嘉靖二十四年八月丁巳条、総頁五七四〇。
- (133) 「明」沈懋孝『長水先生文鈔』「四餘編」頁十六a—十七b。
- (134) 「民国」葛韻芬『重修婺源縣志』(『中国地方志集成』第二十七—二十八冊、民国十四年刻本)卷二十八「人物七 孝友一」頁十二a。
- (135) 「康熙」『徽州府志』(台北:成文出版社據清康熙三十八年「一六九九」刊本影印)卷十四「官業」頁四十b—四十一a。
- (136) 「明」李東陽『懷麓堂集』卷九「詩稿九」頁三a—b。
- (137) 「明」李堂『堇山文集』(『四庫全書存目叢書』集部第四十四冊、據北京大學図書館藏明嘉靖刻本影印)卷十一「繪圖贈美鄧令蔣君德政序」頁十三a—十四a。
- (138) 「明」吳玄応『雁蕩山樵詩集』卷十一「五言絶句」頁二十一—二十三。
- (139) 「明」馮時暘、「明」梁天錫、「明」江美中輯撰『安南来威図冊』頁三七八。
- (140) 「明」蘇愚『三省備辺図記』「序」頁三a。
- (141) 蘇愚は自ら「癸未(一五八三)春、余自黔趨閩」と言っており、おそらく一五八二年貴州在任中に準備を始めたのだろう。「明」蘇愚『三省備辺図記』頁九十一a。
- (142) 『三省備辺図記』に見られる四つの戦闘の図式とそれに続く儀式についての分析は、筆者の修士論文の一部に修正を加えたものである。馬雅貞「戦争図像與乾隆朝(一七三六—九五)対帝国武功之建構——以『平定準部回部得勝圖』为中心」頁十六—十九。
- (143) 玄姓が元と表記されていたことについては、「天津」元氏族譜「原譜序(乾隆十二年「一七四七」)http://blog.sina.com.cn/s/blog_43f3947f0100m9w6.html (二〇一〇年十一月十五日にダウンロード)を参照。呉阿衡(?—一六三八)の序には「図紀一書、公不張大其事、亦不詳著其画、然而簡稽之精識、折執之大力、籌較之苦心、已具犁然於茲矣。」とあり、玄黙がこれを編纂したことがわかる。「明」玄黙『剿賊図記』(台北:中研院史語所傅斯年図書館藏雍正九年「一七三一」重刊本)「序」頁三a。「剿賊

「図記」は玄黙の子孫によって何度も再版されており、その内の一つに、孫の元展成が雍正九年（一七三二）に刊行した重刻本がある。元展成「重刊剿賊図記後敘」〔明〕玄黙『剿賊図記』頁五十三。元展成の子、元克中もまた乾隆三十四年（一七六九）に再版をしているが、その題識には「先大人重刻於桂林藩廨、復刻於臯蘭撫署。」とあり、元展成の再版は一度ではなかったことがわかる。〔明〕玄黙『剿賊図記』（北京国家図書館蔵清同治十一年「一八七二」石印本）参照。この同治十一年の石印本は、『明史 列伝』、吳阿衡序、元展成序、王酒の雍正十一年（一七三三）の題跋、元克中の題識を付す。この北京国家図書館蔵石印本と前述した傅斯年図書館本のほかに、道光元年（一八二二）金陵の甘福が刊行した重雕本（北京国家図書館蔵）があり、これには『明史 列伝』、吳阿衡序、元展成序、甘福序がある。傅斯年図書館本の冒頭の吳阿衡序は最初の二頁を欠き、卷末の王酒跋は後半を欠く。これは甘福の刊行した重雕本とは異なる版本である。傅斯年図書館本と石印本の文字内容や挿図はほぼ一致しているように見える。玄黙の子孫が行った再版については、「披閱之餘、覺鉄馬間、凜然生氣具在、用是重為刊刷」、あるいは「當年籌兵馭將、滅賊保疆之績、犁然在目」であるため「重刻而新之」と記されており、もとの明刊本からの改変は少ないと考えられる。現存する傅斯年図書館本と石印本から当初の状態を推察することができるだろう。

(14) 高迎祥等衆と明兵の攻防については、Roger V. Des Forges, *Cultural Centrality and Political Change in Chinese History: Northeast Henan in the Fall of the Ming* (Stanford: Stanford University Press, 2003), pp. 182-193を参照。

(145) 〔明〕玄黙『剿賊図記』（北京国家図書館蔵清道光元年「一八二二」刊本）頁三a。

(146) 〔明〕玄黙『剿賊図記』頁二b。

(147) 〔明〕玄黙『剿賊図記』頁三a。

(148) 〔清〕張廷玉等撰『明史』卷二六〇「列伝 陳奇瑜 元黙」頁六七三三。

(149) 〔明〕王材『念初堂集』卷十四「序」頁十一b—十二a。

(150) 『明代研究』の査読者からは、『剿賊図記』出版に見られる即時性は、当時の人の時事に対する関心の高さのあらわれではないかとのご意見をいただいた。

(151) 『三省備辺図記』の図記は各地の戦闘に対する全体的な説明を意図したものである。挿図では戦闘の激しさが強調され、図式による型に沿った処理が見られる。このため文字による記録と絵画との関係はさほど緊密でない。しかし、各図式は兵士、倭寇、武器、軍旗を画面いっぱい細かく描写しており、鑑賞者はこれにより戦局を想像することができる。このように、『三省備辺図記』はやはり叙事的な性格が強いと言える。『剿賊図記』の図記も『三省備辺図記』と同様、各戦闘に対する全体的な説明であり、挿図との関係はあまり密ではない。さらに『剿賊図記』においては山水の広々とした景観描写に重点が置かれ、画中人物が少なく、その活動の範囲も狭いため、叙事性は減少していると言える。

(152) 馬孟晶「耳目之玩—從『西廂記』版画挿図論晚明出版文化対視覚性的関注」『国立台湾大学美術史研究集刊』十三（台北、二〇〇二）頁二一九—二二〇。馬孟晶氏は、『剿賊図記』はおそらく晚明に流行した名山図版画の影響を受けていると教示してくださった。ここに感謝の意を表します。例えば『天下名山勝概記』（劉昕主編『中国古版画 地理卷 名山図』長沙・湖南美術出版社影印墨繪齋明崇禎六年「一六三三」刻本、一九九九、頁一—五十五）などが挙げられる。

(153) 〔明〕雷思忠集、〔明〕曹思彬校正『王公忠勤録』（台北・中研院史語所傅斯年図書館蔵明万曆刊本）図頁二b—四a。他に周心慧主編『新編中国版画史図録 第六冊 明万曆版画（三）』（北京・学苑出版社、二〇〇〇）頁二二—二二三、周蕪編『中国版画史図録』（上海・上海人民美術出版社、一九八八）頁一六八など。これらの資料は林麗江氏のご教示による。ここに感謝の意を表します。

(154) 〔明〕劉錫玄『巡城録』（台北・国家図書館蔵）。また周蕪編『中国版画史図録』頁一七〇—一七一。劉錫玄についての研究には、何淑宜「圍城與夢卜—晚明士紳劉錫玄的仕官與信仰」私立東呉大学歴史系主催「第七届史学與文献学術研討会」（台北、二〇〇九年五月二十二日—二十三日）

があるが、筆者は未見である。

- (155) 明代後期には同時代人の戦争事績の絵画化に加え、宋人の事績の絵画化(報功図)も流行していた。例えば「武威石源流世家明代忠良報功図」(別名「石守信報功図」安徽省博物館蔵)などが挙げられる。林麗江氏のご教示に感謝します。王伯敏氏はこの図を明代後期の徽派版画とする。王伯敏「石守信報功図探討」同氏『中国版画史』(九龍・南通図書公司、出版年不詳)頁一二九―一三八、七十一―七十二。図版は周蕪『徽派版画史論集』(合肥・安徽人民出版社、一九八四)図一を参照。他に上海博物館蔵「賜胡氏世家朝代忠良江左名帥報功図」と「新安明経胡氏授田宅於績之胡里鎮八景中歴代報功図」があり、王伯敏氏はやはり晚明徽州の刻工によるものとする。王伯敏「大型古版画『報功図』」『東南文化』一九九(南京、一九九八)、頁一三三―一三五。

- (156) 図版は、仇英『倭寇図巻』と中国国家博物館編『中国国家博物館蔵文物研究叢書 絵画巻 歴史画』頁五十四―六十七を参照。『抗倭図巻』については、孫鍵「明代倭患與『抗倭図巻』」中国国家博物館編『中国国家博物館蔵文物研究叢書 絵画巻 歴史画』頁二二九―二三三、陳履生「紀功與記事―明人『抗倭図巻』研究」『中国国家博物館館刊』二(北京、二〇一一)頁八一―三三三、朱敏「解説明人『抗倭図巻』―兼談與『倭寇図巻』的關係」『中国国家博物館館刊』二(北京、二〇一一)頁四十七―六十四を参照。「倭寇図巻」については、須田牧子著、彭浩訳「『倭寇図巻』再考」『中国国家博物館館刊』二(北京、二〇一一)頁三十四―四十六。『中国国家博物館館刊』での最新の研究成果を教えてください。また、板倉聖哲氏に感謝いたします。また、呉大昕「倭寇形象與嘉靖大倭寇―談『倭寇図巻』、『明人抗倭図』、『太平抗倭図』」『明代研究』十六(台北、二〇一一)頁一四一―一六一も併せて参照。ご教示くださった李卓穎氏に感謝します。
- (157) 東京大学史料編纂所須田牧子氏と東京大学東洋文化研究所板倉聖哲氏のご協力により「倭寇図巻」を見ることができた。ここに感謝の意を表します。
- (158) 須田牧子氏は二巻の赤外線撮影画像に「日本弘治三年」と「弘治四年」

の文字を認め、これは王直が敗走後、捕らえられ、斬首された記念的な年にあたるため、この二図は「嘉靖大倭寇」における明軍の勝利を象徴する描写」であるとす。須田牧子著、彭浩訳「『倭寇図巻』再考」頁四十三―四十六参照。万暦年間における嘉靖倭寇への興味については、呉大昕「猝聞倭至―明朝対江南倭寇の知識(一五五二―一五五四)」頁二十九―六十二、呉大昕「海商、海盜、倭―明代嘉靖大倭寇の形象」を参照。

- (159) 蘇州片については、楊臣彬「談明代書畫作偽」『文物』四(北京、一九九〇)頁七十二―八十七、九十六、Ellen Laing, "Suzhou Pian and Other Dubious Paintings in the Received Oeuvre of Qiu Ying," *Artibus Asiae* 59.3/4 (2000), pp. 265-295. 李仲凱「話說蘇州片」同氏『贗品述往』(西安・泰北文藝出版社、二〇〇四)頁九十九―一〇〇参照。

- (160) 明清時代の「清明上河図」に見られる図式の模倣については、古原宏伸「清明上河図」(上)(下)『国華』九五五、九五六(東京、一九七三)頁五―十五、二七―四十四。王正華「過眼繁華―晚明城市図、城市觀與文化消費的研究」李孝悌編『中国的城市生活―十四至二十世紀』(台北・聯經文化事業出版社、二〇〇五)頁一―五十七。馬雅貞「中介於地方與中央之間―『盛世滋生図』の双重性格」頁二八七―二八九を参照。

- (161) 「清」張鑑「文徵明画平倭図記」『冬青館集 甲集』巻四、頁五b―十一a。仇英『倭寇図巻』、中国国家博物館編『中国国家博物館蔵文物研究叢書 絵画巻 歴史画』頁五十四―六十七を参照。

- (162) 明清時代における王翠翹の故事の流行については、陳益源「王翠翹故事研究」(台北・里仁書局、二〇〇一)頁一―五十四参照。張鑑が、翠翹、綠珠とその座する鹿頭船を精細に描写するのに対し、「抗倭図巻」では人物が判別できるくらいで、描き方は張鑑の記述ほど細緻ではない。また伝仇英「倭寇図巻」にはこの描写は見られない。この差異が、絵画の品質に由来するものか、時間的な変化によって生じたものなのかについては判断を保留したい。

- (163) 「胡梅林平倭図巻」の記述と比較することで、「抗倭図巻」に描かれる、胡宗憲、趙文華、阮鶚、趙孔昭、四文臣(郎中郭仁、副使劉燾か徐汝、

参政汪柏、參議王詢)、徐珏、尹秉衡、盧鐘、翠翹、緑妹などが同定でき
る。

(164) 「明」佚名『戚南塘剿平倭寇志伝』(上海:上海古籍出版社據北京図書
館藏明刊本影印、一九九四)。

(165) 陳大康『明代小説史』頁五八五、五九三。このほかに、明代中期の于謙
(一三九八—一四五七)の事績を題材にした小説、『于少保萃忠伝』があ
る。挿図は漢語大詞典出版社編『中国古代小説版画集成』冊四(上海:
漢語大詞典出版社、二〇〇二)頁八七三—九一四を参照。

(166) 例えば文人や画家の肖像については、Richard Vinograd, *Boundaries
of Self: Chinese Portraits, 1600-1900* (Cambridge: Cambridge
University Press, 1992)の專著がある。また、皇帝の肖像は近年特に注
目を集めている研究テーマであり、Cheng-hua Wang, "Material Culture
and Emperors: The Shaping of Imperial Roles at the Court of
Xuanzong (r. 1426-35)", pp. 148-272, Hui-chi Lo, "Political Advancement
and Religious Transcendence: The Yongzheng Emperor's (1678-1735)
Deployment of Portraiture," 陳葆真『「心写治平」——乾隆帝后妃嬪図卷和
相關議題的探討』国立台湾大学美術史研究集刊』二十一(台北、
二〇〇六)頁八十九—一五〇などが挙げられる。

(167) 楊新『明人図繪的好古之風與古物市場』『文物』四(北京、一九九七)
頁五十三—六十一。

(168) 佚名編『閩嶼彙編』(『台湾文獻彙刊』第二輯第一—七冊、據清康熙刻
本影印)。

(169) 図版は中国国家博物館編『中国国家博物館藏文物研究叢書 絵画巻
歴史画』頁七十八—八十五、八十六—九十一を参照。

(170) 聶崇正編『故宮博物院藏文物珍品大系十一 清代宮廷絵画』(香港:商
務印書館、一九九九) 図六十九、頁二五九—二六七。

〔付記〕 本稿は国科会計画NSC99-2410-H-007-004の研究成果の一部であり、内
容の一部を二〇一一年十二月十日、東京大学史料編纂所で行われた「倭寇と
倭寇図像をめぐる国際研究集会」で発表しました。討論に参加し、質問をし
ていただいた出席者の皆様、特にコメンテーターの山崎岳先生に感謝いたし

ます。また、本稿の中国語原稿は『明代研究』十七(台北、二〇一二年十二月)
頁四十九—八十九に掲載されています。執筆にあたり、筆者の間違いを指摘
し、貴重な助言を下された多くの先生方と学友たち、『明代研究』の匿名
の査読委員お二人、また日本語訳を担当して下さった植松瑞希氏に感謝の意
を表します。

(翻訳:植松瑞希)